

第Ⅲ部

考察と課題

第10章

考察：親子による展示観覧の特徴と その体験を理解する新しい枠組み

はじめに

筆者は、新しい動物展示法のコンセプトが影響して作られた、ゴリラの生態展示（上野動物園）とチンパンジー新展示（多摩動物公園）が、従来の展示法と比較して、家族連れ来園者への展示の意図の伝わり具合に差異があるのかどうかを検証し、展示を利用した来園者相互のコミュニケーションの違いを調査した。また、コミュニケーションの特徴を考察する手だてとして、さまざまな年齢層の子どもや大人が、動物行動の解釈のしかたと表現にどのような違いが見られるのかも調査した。さらに、新しい展示法そのものに対する、来園者自身の意見と、展示解説に日常的に携わる展示者側の意見とを比較検討した。

これらの諸調査は、あくまで展示者側の立場から、家族連れという最多の来園者層の展示観覧体験を深く知り、それを足がかりに今後の動物展示のあり方や、展示の生かしかたに必要なことは何かを探り、その具体的な方向性を見いだすために行われた。さらに、親子連れ来園者の展示観覧体験を理解するための枠組みについても、考察を加えたいと考える。ただし、異年齢かつ異性から構成される家族という特性のうち、本論では親子間という「異年齢間」という側面を重視しており、異性間（父母間・兄妹間・娘と父親間など）の側面はとりあげていない点をあらかじめ指摘しておこう。

以下、この立場から考察を進める。

1 節 親子連れ来園者への「展示意図」の伝わり具合を左右する要素

ゴリラ生態展示もチンパンジー新展示も、悪化する野生生息地環境や絶滅の危機と保護の必要性、本来の生息地（森林が必要で、とくにチンパンジーには登れる木がたくさん必要）に関する情報伝達、その種本来の持つ行動を知らせることを展示意図としていた。具体的には、動物園側（展示者側）が来園者に伝えたいことは、ゴリラの生態展示では「生息地情報」と「繁殖計画」、チンパンジー新展示では「知的能力・運動能力・社会行動および生息地情報」であった。

家族連れ来園者の発話割合の増減を指標にし、割合が増加した場合を「効果的伝達」と仮定すると、ゴリラについては、①より生息地の自然に近い状況を見せるという展示手法の「新しさ」にもかかわらず、本来の生息地の想像が効果的にされたとはいえない。②繁殖計画に関する話題は発話の中にはほとんど現れず、意図伝達はなされなかった。しかし、③巣作り行動や採食・休息などの「見えた行動についての発話」は増加し、ゴリラの行動に対する興味が示された、という結果が得られた。

同様に、チンパンジー新展示では、旧展示に比べて、①知的能力については、伝達効果は見られたが、②運動能力は「その見せたい行動の頻度の低さ」によって、伝達効果が合ったとは言えず、③社会行動は「個体同士の関係の見えにくさ」も影響し、発話割合が減少し、群れ全体の頭数の把握や雌雄判別においても、効果があったとは言えなかった。④生息地情報は、展示館内の野生状況を知らせる展示物についての発話割合が増加し、その点で伝達効果は見られた。

以上のように、それぞれの展示意図伝達が全体としてうまくなされたとはいえないが、少なくとも動物の行動が見えた場合は、そのことに対しての来園者の興味は得られ、発話に結びついた。また、思わず手を重ねたくなったり、さわりたいくなる展示物がある場合は、その展示物に関する発話が多くなり、交わされるコトバの中にも、展示意図への関連がみられた。

これらの結果を筆者は下記のとおり解釈する。

1-1 「動物それ自体」あるいは「各展示物」への個別の関心

野生でのゴリラやチンパンジーの絶滅に瀕している状況や、生息地に関する情報提供は、実際、主に写真パネルとそのキャプション、ビデオなどで構成・表現されており、それらの展示をある程度の時間をかけて見たり読んだりしないと、野生での状況を知ることは難しい。動物園での家族連れによる一般的な展示利用の特徴は、展示動物それ自体に注目しがちで、他の解説パネルなどをなかなか読んだり見ないからである（Namiki 1996）。

つまり、ゴリラもチンパンジーも、その「展示全体」あるいは展示を構成している各展示物を関連づけて見ようとしているのではなく、「その動物」を見たいあるいは「その動物がしている行動」に興味を持つ傾向があるために、新しい展示法の意図である、「野生生息地」が伝達されにくいのではないかと考えられる。少なくとも、親子連れ来園者は、そこにいる動物の姿や行動、表情に強い関心があり、限られた展示時間の中で、生息地状況を解説したパネルなどを読む時間をさけないのである。

ただし、チンパンジー新展示での解説機能を集中させた展示館では、少なくとも「道具使い」や「類人猿の大きさ比べ」といった、チンパンジーという動物を理解するのに基本的なことがらについては、展示物（実際にチンパンジーが使用している UFO キャッチャーや人工アリ塚のしくみがよくわかる、実物や模型による解説、あるいは実物大レリーフ）の存在が来園者の強い興味を誘い、実際の発話の頻度にも表れた。実物大の手形があると、思わず手を重ねてみるという、多くの子どもに共通してみられた行動は、その強い関心が行動として表れただけでなく、「いっしょにいる親に自分の行動を見てもらおう」という働きかけによって、大人の関心も引き寄せる。そして、大人も子どもからのこの誘いによって、チンパンジー・オランウータン・ゴリラそれぞれの手の大きさと形がヒトに似ていてかつ異なることを知るのである。

逆に、人工アリ塚のしくみと道具使いについての模型を用いた解説では、親の方が子どもに文字を読んで説明を加えていた場面がしばしば観察された。

つまり、「生きているその展示動物の行動や表情」あるいは「興味を持ちやすい展示物」という、いわば来園者が興味をもちやすいそれぞれの「できごと」や「もの」が確かにあり、それらが展示意図と強い関連を持っている場合は、意図

がより効果的に伝わる可能性があるということになる。その意味で、解説的要素をもった展示物は、「興味を引きつける要素とは何か」という内容と、「どうしたらより興味をひくことができるか」という表現をより深く吟味して、配置していく必要があると言える。

1-2 展示観覧時間の長短に関連する展示の要素の考察

展示意図が、解説パネル類による情報利用の時間がないと伝わりにくいとすれば、全体の観覧時間の長さとその中での解説パネル類利用に当てる時間の割合が問題となると考えられる。

1) 物理的環境の整備のされかた

ゴリラのオープン展示と生態展示とでは、滞在時間が平均して生態展示で 20 秒近くオープン展示より短くなってしまった。これは、第一に、上野動物園が常に来演者が多く、調査日である土、日曜日には「ゴリラとトラの森」全体が混雑する状況も影響しているためと考えられる。じっくりと見ていたいと思っても、限られた「覗き窓(veiwpoint)」は、自分たちだけで独占するわけにもいかず、その場を譲る必要があるからだ。

その点、オープン展示では、柵を兼ねた手すりがあるために、ちょうど親子で身を預ける形で対話しながら動物を見ることができたり、手すりぞいに数十人も来園者が並んで見ることができ、場所を譲るような必要がないという状況が、観覧時間を長くしたのだと考えられる。

つまり、少なくともゴリラ生態展示では、展示を見るために過ごせる場所を狭くしてしまったために、土・日の日中という最も来園者の多いときは、他の来園者を気にして観覧時間が短くならざるを得ないのである。このことが、写真を豊富に使った解説パネルや各種展示物を配置していても、「ちらっと見て通り過ぎるだけ」で終わってしまう、あるいは利用するにしてもその中のごくわずかだけ、という状況を生み出している。

しかし、チンパンジー新展示での観覧時間は、旧展示に比べて 200 秒も長くなり、その時間の多くは「展示館」利用に費やされた。興味を持てる展示物に加え、展示館の中からもチンパンジーをガラス越しに間近に見ることもできるという工

夫、空調設備と座るところをつくった工夫により、この観覧時間の長さがもたらされ、その結果、チンパンジー新展示での「知的行動をより知って欲しい」という点での展示意図伝達が成功しているのである。

このように、親子連れという来園者にとっての、相対的な過ごしやすさは、物理的環境（ゴリラ展示では大勢が並んでみることができる・よりかかれる手すりがある、チンパンジー展示では動物を間近に見ることのできる大きなガラス窓を展示館の中に設置する・子どもがさわりたいくなったり興味を持てる展示物を配置する・空調設備や座れる場所の整備）が大きく関わっていると考えられる。

2) 強化ガラスを使った窓

ところで、「強化ガラスをはめ込んだ窓」は、ゴリラの生態展示でもチンパンジーの新展示でも共通して使われており、新しい試みであった。この窓の配置は来園者の観覧時間の増減にどう関与したのだろうか。ガラス窓の利点は、もし窓のすぐ近くに動物がいれば、ほんの数十センチのところ動物をよく見ることができる点にある。ガラス窓に動物の息がかかれば、うっすらと白いくもりが見えるほどである。

ゴリラ生態展示では厚い壁が展示場をぐるりと取り囲み、そのガラス窓からしか動物のいるところを見ることができないようになっている。15メートルほどの幅の大きな窓・数メートルの幅のもの・ひとりずつしか見ることのできない覗き窓と、大小さまざまなガラス窓が点在する。利用する窓の位置によっては、同じ個体も顔の表情がよくわかる場合・背中側が見える場合など見え方も異なる。窓の利用のしかたを独自に調査したわけではなく、調査者の印象から述べるとすれば、来園者は、よく見える場所を探そうとしてあちこち移動し、他の来園者がまわっている場所にはゴリラが間近にいると予想して、他の窓を無視してそこにいこうとする場合がしばしばあり、行ってはみてそこにあまり人が多いとあきらめてしまうようこともよくあった。

一方、チンパンジー新展示では、展示館という屋内施設にだけ数メートルのガラス窓が設置されており、ここで接近して動物を見ることができ、屋外からも柵越しに見えるようになっている。つまり、チンパンジーでは、動物を見る場所が多様に用意されており、ガラス窓はその選択肢のひとつであるために、窓に

殺到する必要はなく、そこに人だかりがしていても、屋外から見たり、展示館の他の展示物利用によって、自分のはいるスペースが空くの待つこともできる。もし自分たちが窓の所にいても、他の来園者も展示館の中でそれなりに楽しんでいることがわかるので、そこを早く譲らないといけない焦りのような気持ちは抑制され、ある程度満足するまでガラス窓のところに滞在でき、それで全体の観覧時間が長くなったと考えられる。

どちらも共通してなるべく観覧者と動物の距離を狭め、間近に動物の行動や表情を見てもらうことが展示意図であり、その機会を増やすための手段がこの「ガラス窓」設置なのであるが、ゴリラ生態展示とチンパンジー新展示のそれぞれの新しい試みが、観覧時間の点ではこのように対照的であったことは、重視されるべきだろう。

1-3 何が親子連れ来園者に「見える」のか

ゴリラ生態展示では、オープン展示に比べ、来園者が見ることのできたゴリラの行動や運動場内の各種展示物（段ボールや麻袋、草など）について、それらに関連した発話が多く、その意味で「本来の行動（巣作り・草の採食など）を知りたい」伝達効果が得られた。しかし、ドラミングや叩き行動などはそもそも行動発現の頻度が少なく、伝達効果はみられなかった。草や木・水の流れの配置も、生息地想像にそれらを使うという効果もなかった。

チンパンジー新展示では、実際には群れの状況も行動も、旧展示と大きく変わったわけではないが、社会行動や移動行動（運動のしかた）が見えにくくなり、それに関連する発話も減少し、この点での伝達効果は得られなかった。同様に、野生生息地の想像が、展示の諸要素を手がかりにして行われることはなかった。むしろ、旧展示での「散乱している木の枝」を手がかりにして、「木のたくさんあるところ」を生息地として想像し、報告している方がやや多かった。

一方、知的行動については道具解説などの展示物利用・チンパンジーの使う実際の UFO キャッチャーの存在によって、それらに関して知っていることを持ち出す事も含め、発話が増加し、この点での伝達効果は認められた。

つまり、展示場（運動場を含む）のしつらえかたや群れの個体の社会関係によ

って、①動物のその種本来の行動が展開されやすい状況かどうか、②実際に来園者はそれを見ているのかどうか、③その「見ていること」に基づいて展示者側の意図を読みとるかどうか、そして、④直接は見えないが、何かを手がかりにして互いに共通の話題について情報交換するのかどうかをよく整理して扱うべきだと、これらの例は示唆している。

ゴリラのオープン展示では、ドラミングや叩き行動がしばしば行われたが、生態展示ではほとんどみられず、したがって、この行動を「見ることができる」チャンスは客観的に少なくなる。逆に、草や枝、麻袋や段ボールなど、ゴリラがいじったり集めたりできる「もの」が生態展示には豊富にあり、ゴリラたちがそれらを使うところを「見ることができる」チャンスは客観的に多くなる。だが、客観的に多い少ないという「行動発現の頻度」と、来園者が実際にその行動が「見える」かどうかは、異なる。なぜなら、動物を探すことに観覧時間を費やせば、限られた時間で「その行動」を見る条件はそれだけ狭まるからである。

チンパンジー新展示では、客観的には群れの個体間の社会行動や知的行動に大きな差はみられないが、それぞれの個体が自分の居場所を自由に決めることができ、旧展示のように、来園者の一望のもとにほとんどの個体が見える状況ではないために、どうしても「見える社会行動の頻度」が低くなってしまった。しかし、旧展示では柵と堀の向こう側の UFO キャッチャーを遠くから眺めるだけだったけれども、新展示では自分の指を入れてみることもできるような工夫が施され、同じ UFO キャッチャーをはさんで、自分とチンパンジーとが対面でき、枝先を舐めて穴につっこんで餌をとる様子も手に取るようにわかるなど、頻度は変わらなくても「接近して見る」ことができるようになった。接近することができれば、指の使い方や真剣な表情をよく知ることができる。それゆえ、チンパンジー展示でも、行動発現の頻度は変わらないが、その「見えかた」は大きく異なるといえる。チンパンジーの道具使いを見せたいという展示意図の伝達は、この点に関する限り有効な「見え方」を提供し、旧展示よりも成功している。

通常、新しい動物展示が動物にとってどのような環境かを評価するには、もちろん動物のその種本来の行動目録の発現の程度を問題にするが、「展示」であることを考えると、やはりその行動発現の程度や特徴が、実際に来園者の目に「見える」のか、あるいは「意図した見え方」がそこにおきているのかをしっかりと

評価しておくことも重要であろう。

この点に関しては、アメリカ・アトランタ動物園のゴリラ展示において、来園者には「何が見えるのか」の調査結果が参考になる（Jackson, 1989）。それは、ゴリラの数群がいろいろな位置から見えるように工夫していても、来園者が最も集中する時間帯（11時頃から2時頃まで）に実際に来園者が見ることのできることは、ポイントごとの滞在時間や、他の解説物利用の状況と関連があり、必ずしも、客観的にゴリラとその行動が見える環境が用意されているからといって、それを「見る」わけではないということである。

つまり、来園者は自分の興味や既知のことがらに関連させて何かを「探す」のであり、その行為のひとつとして展示動物それ自体や展示物を選択的に「見る」「関わる」のである。

展示を通じて伝えたい意図は、来園者のこうした選択的な行動に深く関連して、届き具合が異なる。本研究はそれ以上の結論を導くことはできないが、少なくとも、「一般的来園者」という見方ではなく、何にもともと興味を持っている来園者なのか、あるいはそのグループがどういう場所としてその展示を認めているのか、位置づけているのか、そこに何を期待しているのか、という多様な知的興味を備えた存在として来園者を具体的にとらえることが、この探求に道を開くであろう。

2 節 来園者の「交わりコミュニケーション」の質の違いに及ぼす年齢の要素と展示法

2-1 年齢による関心の持ち方の違いに基づく「交わり」の特徴

第8章の「大小2頭のゴリラが1本の枝を両側からつかんでいる行動をどう見るか」という実験によると、その解釈のしかたに年齢差がみられた。つまり、幼児は、自分の年齢に近いと思われる動物個体に注目しがちであり、小学3年生では、個体への注目だけでなく、個体同士の関係にも関心が広がるようになることが示された。さらに、高校生では、大きなゴリラと小さなゴリラがじゃれあっている、親が子とコミュニケーションをとっているなど、2頭の関係にほとんどが

言及するようになった。大人は、「大きいゴリラが餌を与えている」など、大きなゴリラの側に立った回答が多くなった。

発話採集の結果が示すように、類人猿展示の実際の現場においては、幼児は自分の関心を持った個体への呼びかけや行動のまねをし、あるいは、興味を持った行動について、気づいたこと・見えたことを同行の大人に「報告」し、その見えたことについて訊ねる「疑問」提起がなされることが観察された。また、とくにチンパンジー展示で観察されたように、親子連れのうち母親は、アカンボウやコドモのチンパンジーに注目する際、「赤ちゃんだっこしているよ」「おかあさんかな」「あそこにのせてる」と子連れのメスの立場から発話するケースが多く、逆に幼児は、「たたかれてる」「あそこにたっちしてる」「おっぱいもらってる」と、コドモのチンパンジー側に立って発話するという特徴が得られた。しかし、これらの社会行動に関する発話割合は、旧展示に比べて、新展示で減少してしまった。その理由は、全体を見渡せないため、なかなかアカンボウやコドモの存在に気づくことができず、じっくりと個体関係を観察しにくい展示法になったからだと思われる。ただし、「キッズルーム」にはいつてきたコドモのチンパンジーや、UFO キャッチャーから餌をとろうとしてなかなかうまくいかないコドモのチンパンジーに、声をかけたり応援している発話が見られるなど、条件によって、コドモのチンパンジーと密着した関わりがみられた。

関心を持つ個体の違いが、親子での交わりの成立に影響を及ぼしているとするれば、その展示法によってさまざまな個体関係が見渡せるのかどうか、動物の表情を読みとることが可能なほど接近できるのかどうか、という「展示法の特徴」も、交わりの内容に深く関連すると考えられる。また、見る側の年齢が動物行動の見え方にも大きく影響し、「見る側の関心の持ち方の違いによるコミュニケーション」がいつそう豊かに展開する可能性も指摘できる。もし、「見え方が違う」ことが来園者自身に自覚されれば、年長者は、人間の側の認識発達に関連した「動物行動のとらえ方の違い」があること、つまり幼児には大人と異なる見方があるということを知ることになる。このように、生き物の介在により、年長者つまり親は、子どもの見せる動物への関心の表れが自分と異なることを知り、いつそう、「子ども」理解が深まるだろう。そのような理解をもたらす存在としての『動物』に出会えることも、動物園の重要な機能なのだと考える。

2-2 年齢による行動の理解のしかたの違いが影響する「交わり」と展示解説のあり方

同じく第8章の実験からは、幼児や小学生は動物の行動を「していること」をそのまま報告するが、大人は、「その行動には〇〇という目的がある」というとらえ方を示された。すでに小学生でも目的的な類推が始まるが、高校生では目的的にとらえる見方が多くなり、さらに、行動の目的を多様な観点から類推しようとするようになる（部屋に敷き詰められた紙類での引きずり行動に対して「楽しんでる・ストレス解消」、「暴れている・誘っている」など）。大人は逆に、多義的にとらえることが減って、単一的な目的的理解になる傾向がみられた。さらに、飼育体験群は、ゴリラのいずれの行動にも説明可能な目的があるという考えから、その行動によってもたらされることがあるはずとする傾向がみられた。たとえば、興奮を静めるためにドラミングをするなど。つまり、目的から説明するのである。

人間は、成長とともに、見ていることを自分の頭の中で自分のもつイメージと対応させたり比べたりして解釈したのちに、それをことばに表してだれかに伝えるようになると考えられる。「見たまま」の報告は、年齢が上がるにしたがって難しくなるともいえる。こうした、年齢による動物行動の理解のしかたの違いとその表現の違いが、実際の発話内容にも表れた。

事実をとらえた発話に、このような年齢上・経験上の違いがあることを筆者は非常に重視する。というのは、たとえば採食行動を解説者（多くは飼育担当者）が解説する際に、何気なく「上手に木の枝を使って餌を食べてますね」と発言したとすれば、そこには目的的理解と価値観がはじめから含まれているからである。

「上手」は価値観の表れであり、「餌」は目的的理解である。そのことばを使うことにより、逆に限られたイメージを提供する可能性がある。もし、間近に類人猿の手指の動かしかたが見られる工夫があるならば、まず、事実を報告し、その事実を共有する。「親指をあまり使いませんね」など。そののちに、「枝を引き寄せるためにどうしていますか」と問いかけ、また、事実をよく見てもらうのである。「上手」かどうか、それが「餌」なのか「かじりたい対象」なのか「集め

たい対象」なのかは、その後に判断されることなのである。その意味で、解説者が的確な「問い」を用意することが非常に重要になる。

展示法の工夫により、たとえばこのような密着した行動観察が可能になるのであれば、細かいマニピュレーション（手指操作）の様子の観察により、事実から出発して、来園者自身が「上手」「器用」という価値判断へと進むこととなる。

「間近さ」は、ある行動の一断面を「よく見る」上で有効だが、幼児や年齢の低い子どもの「動物行動観察」の解説には、安易に価値観を伴う行動解説は控えるべきで、大人に対しても「事実の見方」を大切にする解説をすべきである。もしその展示法が、遠くにいる動物を見るだけなら、このような密着型の行動観察は不可能であるが、逆に体全体の動きや移動の様子の観察が可能となる。ゴリラのオープン展示での垂直方向への移動（ロコモーション）への興味が子どもの発話の中に表れ、力強く登っていく様子に驚いていた場面が見られたが、その展示法ならではの行動の見え方がよくとらえられている。だから、その行動が野生生活のどのような場面で重要なのかを解説することが重要になる。その際も、単に「あつというまに登ることができてすごいですね」という価値観を含む解説ではなく、「左の腕と右の足をいっしょに動かすなどバランスをとっています、足指もつかめるようになっていきます」「降りるときも、あらかじめ足をかけるところをよく確認しています」というように、事実即ち情報にまず届けるようにする。こうした「事実を見たままに」報告する際、幼児の「報告ことば」すなわち「あ、足でつかんでる」「おしりがある」などは、実に的確で端的な事実報告の表現であり、大いに参考になる。

ことばによる自分のイメージや目的的理解、価値観のからんだ大人の表現に対して、これらの子どもの発話に、筆者は動物行動を素直に見る上でのヒントを感じる。そこで「見えること」をどう親子が交換しあうか、そして子どもの「見え方」にどう注意深く応じるかは、まさに「交わり」の質にも関連する。また、飼育体験群が、行動を目的から説明しがちであるという傾向は、ある意味で注意を要するだろう。というのは、飼育係が行動解説する場合、どうしても結論的な言い方をしがちだということである。その展示法により見えている「事実」に則した報告をし、それに対する解釈を来園者とともにしていくことが課題であろう。

動物行動の理解に、仮説的に目的的理解をもちこむことはあるかもしれないが、

やはり、「事実を見る」ことを出発として、ていねいに観察事実を積み重ねていくことが、次に述べる『擬人主義』のもちこみを排除する上でも重要だと考える。

2-3 動物の擬人的表現や同情的表現への、展示法の影響および 動物行動理解のしかたの年齢的影響

本来、「動物が何をしているように見えるか」「そのときの気分はどういうものかを憶測すること」は、野生動物に対する理解を深める上で、非常に大切なことと筆者は考えるが、そのためには、自分が動物の立場に立ってみることが役立つだろう。この理解のしかたのひとつは、「擬人化」という操作的認識の方法であるが、そこに擬人主義が入り込むという危険も常に存在する*1（ハクスレイ、1927）。動物園での動物解説に、擬人的手法を排除すべきという意見も根強くある*2。

第8章の実験から、次の点が明らかとなった。幼児は、無意識のうちに、まるでその個体に自分が入り込んだように動物の気持ちを想像する。自分の気持ちと見ている動物の気持ちを混じり合わせるのである。小学3年生になると、「動物が見られていること」を視野に入れた動物行動の理解が始まる。幼児のような、「その動物になった気分」と、「眺める自分」との間を行き来しながら、動物を自分に引きつけて考えるようになるのである。動物が人間近い類人猿であることも、こうした「見られていること」に「自分自身がそうだったら」という仮定をさらにもちこみやすかった可能性は否定できないが、高校生や大人ではさらに「見られていること」への否定的傾向が強まった。さらに、大人の中でも、動物理解のエキスパートといえる飼育係は、とくに「動物が見られていること」への拒否感が強く表れ、動物の心理状態を思い測るという態度がみられた。

実際の発話内容のカテゴリー別出現割合から判断すると、①全体が見えてしまいうちに個体数が少ない状態で展示されていると、大人や学童期の子どもには、「かわいそう」と思えるときがあることが示された。さらに、②ゴリラのオープン展示前で実際に得られた、親の擬人化された表現の多さや7歳以上の子どもの擬人化された表現の特徴からは、「自分の気持ちをあてはめて推理する」ということだけでなく、動物への近しい気持ちを擬人的な表現で表している場合（「いじけ

てる」「おこってる」「お父さんみたい」と、ややふざけた、少し見下した要素が入っている場合（「親父ってかんじだね」「楊枝なんかくわえちゃってる」）とが見られた。

「動物を見に来るところ」である動物園で、生きている動物を実際に目の前にすると、その動物に親しみを感じてそれを表現する場合もあれば、その人の持っている擬人主義的な見方が、直接動物への態度として表れる場合と両方が表れる可能性がある。しかし、チンパンジーの旧展示における3歳以下の親子に共通してみられた擬人的表現は、たとえば「すべりだいしてるね（手をたたく）すごいすごい」「あそこにたっちしてあぶないね」というもので、自分がそこにいたらきっとできないことだからすごい、自分がそこに登ったら危なくていられない、というそのチンパンジー個体へのいわば尊敬のような気持ちがその表現をとらせていると筆者はとらえる。そこには、ゴリラへの「親父みたい」という表現とはまったく異なる気持ちが込められているのではなかろうか。

同時に、ゴリラのオープン展示でみられた7歳以上の親子の「同情的表現」が生態展示では少なくなり、チンパンジー展示では新旧どちらにも「同情的表現」が皆無に近かったことを考えると、動物の理解に皮相的な（少し見下したような）擬人主義が入り込みやすい展示環境と、その動物に一方的な哀れさを感じることは無関係ではないと考えられる。一方的な哀れさとは、全体を眺め渡せる殺風景（と来園者には見える）な中に、1、2匹が休息しているだけ（と来園者には見える）の場面を見て、そこに「見られている動物」が自分たちの視線を浴び続けていることに対する感情であり、本当は動物がどのような心理的状况にあるのかはわからないからうまれる感情である。

だが一方、全体が見渡せる中にチンパンジーが展示されていても、個体数が20頭近くもいるチンパンジーの旧展示では、同情的表現はほとんどなかった。ここでわずかに見られた同情的表現は、大きいチンパンジーにたたかれた小さいチンパンジーへの「かわいそう」であり、これは社会行動に基づくものであった。つまり、見ている動物に対して哀れみを伴うような同情的表現がなされているとしたら、それは、一望の下に全部まる見えになってしまうなかに、「単独あるいは非常に個体数が少ない状態」で展示されている「寂しそう」（に見える）な場合に限られるのではないだろうか。もし自分がその動物のような状況でお客さんの

視線を浴びているならいやだろうに、という推測が働き、それをうち消す手がかりがないからではなからうか。

さらに、ゴリラとチンパンジーの種自体のもつ行動特性も大きく影響すると思われる。ゴリラは顔の表情や動きにチンパンジーほどの「大げささ」がないため、わかりにくい。チンパンジーはとくに個体同士の関係において、悔しがったり楽しい気持ちの時の表情や声の調子がよくわかる種類である（もちろん、わかりやすさ/わかりにくさは、我々人間の側の基準に照らしてという意味でだが）。

以上のことから、基本的には動物の行動理解のしかたに、擬人的な方法がとられることは、年齢発達の影響が大きく表れるが、さらに、同情的な表現は、「動物が見られていることへの拒否感」が展示法により助長されて引き起こされる可能性が示唆された。

一方、発達心理学の知見からすると、類推のしかたとしての擬人化は、自然な動物理解の方法のひとつであるとされている。たとえば、稲垣（1995）は、次のように指摘している。

ある動物や植物が、人間と同じようにふるまい、したが人間との類推が適切である事態では、（幼児は）多くのように擬人化を用いる。そしてこの擬人化は、もっともらしい予測と結びついている、ないしは理解可能な何らかの理由をともなった予測と結びついていることが多い。

（略）人間とはまったく異なるふるまいをし、人間との類推がうまくいかない事態では、ほとんどの幼児が擬人化に基づく予測をしない。

（p.61）

また、幼児期以降の、人間との類似性に基づく推論についても、次のように述べている。

人間との類似性に基づく推論様式は、発達につれてまったく消失するものではなく、大人でも最後のよりどころとなる方略として用いるもので、それだけ適応的な価値を持つものであることが示唆される。（p.159）

つまり、生き物の心的状況の推理には、その生き物と人間との類似性が（見た目には）高くなくても、大人でもこの推論方式を採用することがあることが実験で確かめられている。すなわち、その生き物が人間だったらどうかという推理の方法を、よく知らない生き物の理解の際には「最後のよりどころ」として採用するという。この方法は、ごく一般的な類推の方法のひとつに含まれると考えてもよいだろう。したが、動物の行動がみられるときの、その動物の心的状況いわば「よく知らない領域」に対して、幼児期以降いずれの発達段階においても、自分自身や人間の心的状況を思い浮かべそれを根拠として推理することは共通して行われるということになる。もちろん、その共通性はあるつつも、表現方法は年齢によって変化する。

「擬人化」して類推するという心的操作とは、「生き物」であるなら自分自身との共通性をもっていると考えて推理するということで、筆者は、この推理の基礎にある「自分と生き物は同じように感じるはず」という感覚が発達の初期段階からあることが重要なのだと考える。人にはそもそも「動物たちの置かれた状況を彼らの行動・表情から推察し、読みとり、自分自身の感じ方と重ねるといった認識を生み出す傾向」がたしかにあり、それが幼い頃から生じる。こうした自分の感じ方に基づいて、生きている動物を理解しようとする傾向がどの年齢でもあらわれるのである。

しかし同時に、ごく幼い時期の、たとえばチンパンジーの運動能力に感嘆しての「たっちしたまますべりだい、うまい」、あるいは他個体の手にした餌をのぞき込んでいるチンパンジーを見て、「おやつもらわないで（がまんして）えらい」という擬人的表現は、推理しているというよりは、自分が同じような状況におかれたら、できないこと（自分は立ったまますべることにはできない・おやつをみてしまったらがまんできない）なのに、その動物ならできることに対して、驚いている表現である。つまり、自分の側に動物の状況を引き寄せる類推ではなく、逆に自分が動物の方に身を置く感じ方である。「たっち」「がまん」は、なるほど「擬人化された表現」ではあるが、それは、たとえば大人が、ゴリラが麻袋を肩にかけているのを見て「日かげが欲しいんだね」「恥ずかしがりなんじゃない」という擬人的類推の表現とは明らかに異なるのである。

そしてさらに、大人の「誰かさんに似てるね」や「すわりかたが女らしいね」

などの表現は、類推ではなく、「皮相的な」擬人主義による見方が影響したと考える。だから、人間の発達段階において「擬人化」は動物の理解のしかたとして重要な働きをするだろうが、擬人主義と擬人化を同じカテゴリーにひとくくりにせず、注意深く擬人主義を取り除くことが求められていると考えるのである。それがなされないと、擬人化という認識方法自体の効用が無視されてしまうことにもなりかねない。

擬人主義は、しばしば哀れみを伴う同情的表現として端的に表れる。これを筆者は皮相的擬人主義と呼ぼう。展示者側が学ぶべきことは、これらの哀れみを伴う同情的表現に出会ったならば、その展示法と種特異性も大きく影響している可能性があるということである。人々は、それ以外に手段がなければ、やはり動物それ自身の表情や行動をその展示環境において、動物の理解をすることになる。野生動物への理解が、まず動物への尊敬から始まり、動物と人間の共生的関係を目指すのであれば、一方的な同情心をおきさせるような展示方法を改良するか、何らかの積極的な展示解説をしていく必要がある。その際、解説員（多くは飼育係が行う）は、動物が見られていることへの拒否感があることから、逆に、見ている人から同情心を持たれて「かわいそう」と表現されることや、自分自身と動物との一体感が強いために、同情的に見つめられることをきらう。そのため、積極的な展示解説を行わないという悪循環が積み重なる。

そこで、展示を見ながらの動物行動解説には次のような工夫が求められる。もし、「ひとりぼっちでかわいそうだね」と自分の印象を語る来園者がいた場合は、安易にそれを受けとめず、「そう見えるのはどうしてかな」「あの動物は何をしたいのだろう」「本当はなにをしようとしているのかな」という問いかけをする。それが、皮相的な解釈を排し、動物行動の理解をする上で助けとなるだろう。動物の毎日の生活の様子を知らせ、その展示環境の中で少しでも暮らしやすくしていくためにできることは何かを、来園者といっしょに考える機会を積極的に持つことが必要だと考える。

ただし、くり返しになるが、幼児にみられる、動物の気持ちと自分の気持ちが入り交じるような未分化な状態に対して、「本当は何をしているのかな」という投げかけは無理であろう。むしろ、動物と自分の気持ちを同じだと感じるができる幼児の表現に、大人の側が、原初的な「同じ生き物同士としての動物と人

間の関係」をみてとることも可能であろう。動物の大きさや表情、動きそれ自体に対して発せられる幼児の発話には、「共感」がおきていることを率直に感じさせるものがしばしばある。我々大人の中にも、注意深く探索すれば、何か心の奥の方で動物の理解を助けるものがあるはずである。幼児の何気ない表現の中に、我々人間の奥底で動物とのつながる何ものかを見いだせるのではないだろうか。つまり、率直な「未分化」の状態自体を共有するということも、まわりの大人にとっては、動物とのかかわり合いの一種なのである。

このような観点に立てば、3歳以下の幼児と親で、チンパンジー新展示では、旧展示よりもこのような共感が表れにくかったために、擬人的表現が減少（親は有意差あり）したのだという解釈も成り立つ。筆者は、擬人的表現の減少をむしろよいという立場から作業仮説をたてたが、いろいろなチンパンジーの社会行動や運動がいつでも見える旧展示の方が、この年齢の子どもを含む家族連れにとっては、動物をより近い存在として見られる展示であった可能性もあり、その結果としての擬人的表現を否定するのは好ましくないと考えられる。

2-4 相手の発話へのあいづちなどにみられる「価値観」の受けわたしと展示法の関係

チンパンジー新展示におけるインタビューで、同じ場面を見て「興味を持ったことは何か」に対して、幼児は「バナナをとっていたところ」「枝で何かとろうとしていたこと」と報告するが、大人は「知恵があること」「頭がいいこと」と報告した。無意識のうちに、大人は見ていることがらに「自分の解釈」と価値観を含めた回答をしていると考えられる。

このことは、たとえば、動物を見ながらの、とくに相手の発話に対する「あいづち」のなかにも表れた。筆者は、相手の発話に応じる場合、肯定するような表現のあいづちと、否定したり異なる観点を提示するような表現とを対比させた。

たとえば、チンパンジーの採食を見ている幼児（3歳）が「はっばとっちゃだめだよ」といったことに対して、母親が「じょうずだね、足でつかんでる」と受け答えした場面があるが、ここにもすでに価値観（じょうず）が表

れている。同じく子ども（7歳）がチンパンジーのゴドモのことを「ちいさーい」と発話すると、母親が「ほんとだ、かわいいねー」とやはり肯定しつつも自分の価値観を受け渡している。逆に、4歳の子どもが「おサルさーん」と発話したことに対して、母親が「なんだかお尻きもちわるい」と発話したり、7歳の子どもが、ジョーというアルファオスの死亡のことを知って「死んじゃったんだって、かわいそう」と言ったことに、母親が「しかたないよ、命だもの」と応じているが、これらは子どもとは違う見方や価値観を表現している。また、チンパンジー新旧展示の比較では、新展示での方が、単に子どもの言葉を繰り返すような応じかただけでなく、引き続いて解説を加える割合が増える（たとえば「チンパンジーいないね」に対して、「うん、暑いからね」。「ミカンも食べるの?」に対して「野生では1日6時間食べるって」。「かわいいね」に対して、「遊んでいるんだよ」）傾向があると指摘した。

一方、ゴリラでは、生態展示での方が、3歳未満の子どもと親にのみ、異なる観点の提示をする親が多かった。たとえば、「こわい」と言えば「こわくないよ」、「バットでばーんとしちゃう」と言えば「バーンはだめだめ」と応じるなど、親が子に「ゴリラはかわいい、こわくない」という見方を伝えようとしている傾向がみられた。さらに、4歳以上の子どもとその親では、オープン展示での方が、ゴリラを人間に近い存在として見ることを親が受容する発話（「人間みたいだね」に対して「やっぱりそっくりだね」、「おりこうだね」に対して「わらう」など）が、やや多く見られた。

以上のように、実際の動物展示において、大人から子どもへの「動物をどういう存在として見るか」に影響するの価値観の受け渡しが行われ、それは何気ないことばのやりとりにも確かに反映していることが示された。ゴリラの生態展示の方がオープン展示よりも、ゴリラを「怖くない存在」「近しい存在」として伝えようとしている傾向があることは、やはり、どのような展示法を採用しているかということと「動物をどういう存在として見るべきなのか」という価値観を含む動物の見方の提示とが、深く関連していることを示唆している。

また、チンパンジーの新展示で「引き続いて解説を加えたやりとり」がみられたが、近くにある解説のためのさまざまな機能を利用し、その解説の内容に大人が自分の価値観を加えて説明している場合がみられた点も、銘記しておきたいと考える。

3節 新しい展示法を支える二つのコンセプトと来園者の展示観覧体験の関係

現在みられる動物展示の改革の方向については、第I部第2章にまとめた。大きく分けて、①ランドスケープイマージョンというコンセプト（来園者が再現された野生動物生息地にまるで浸りこむような）に基づく生態展示と、②野生状態のときの行動が再現されるような、行動誘発できる要素を展示環境に取り入れる「環境エンリッチメント」コンセプトに基づく行動学的展示であり、その日本における典型は、類人猿展示改革にもみられた。

この二つのコンセプトは一見、来園者側に立つのか動物側に立つのかの違いがあるように見えるが、「展示」である限り、実は「何を見せたいのか」のうちの「何を」に違いがあるのであって、当然、来園者の視覚に依拠している点は当然共通している。

ランドスケープイマージョンのコンセプトは、「展示を見た後の記憶が人工的飼育環境に結びついてはよくない」と考えた米国の造園デザイナー、コーのアイデアが活かされて、多くの展示改革に採用された背景を持ったものだった。つまり、人工的に見えないような最大の工夫によって、「生息地の自然」を来園者に見せるべき内容とおいたのである。

また、退屈している飼育動物が、いくぶんでも動物自身が持っている行動欲求が満たされるように飼育環境を整備することから出発した「エンリッチメント」のコンセプトは、やはり米国の動物園をフィールドとした動物行動学者のマーコヴィッツに始まるが、動物園での動物福祉をすすめる運動と相まって、「動物本来の生き生きとした姿に少しでも近い行動」を見せるべき内容とした。それも当然、来園者の「視覚」に依拠することとなる。

前者は来園者の視覚的錯覚を利用しながら「環境に浸る」体験を重視した。後者は、飼育環境を整えるという動物自身の福祉的観点から出発し、その動物に配慮された飼育環境によって誘発された自然な行動を見ることによる、動物の理解を期待した。実際には、この二つのコンセプトは各地の動物展示改革の具体的な実践のなかでは融合している。筆者の調査地であったゴリラの生態展示では、布きれや段ボール、草や枝など、巣材や遊び道具が豊富に置かれており、新チンパンジー展示では、展示場の広さとバックの林が自然環境のイメージづくりに貢献するような計画がもたれていた。要するに、単一のあるいは主要な展示意図のみが先鋭化することはないのである。

現実の動物展示では、こうした展示意図が各々先鋭化するわけではないということが、逆に、展示を見る来園者の自由な観覧体験を保障するのではないかと考えられる。「動物の本来の生息地の想像を擬似的自然を見ながらしてほしい」とことと「野生状況で見られるはずの自然な行動を飼育下でも見てほしい」という「望まれる展示観覧体験」は、残念ながら幼児を含む親子連れという来園者層に必ずしももたらされてはいない。むしろ、自分たちの関心を持つ展示物や動物それ自体を自主的に探索しながら、展示を利用している。

筆者は、やはり「自分なりの解釈をし、見た体験に新たな意味を付与していきこうとする来園者の能動性」がどのように展開しているかという観点から、展示意図の伝わり具合を展示者側として知ることが重要なのだと考える。そこで、来園者の行為を、「情報受信的な行為」ではなく、「主体的・能動的行為」としておく立場から、それらの行為を展示の意図と関連させて考察を加えよう。

3-1 来園者の新しい「視覚」体験をつくりだす新しい展示手法

としての「ランドスケープイマージョンのコンセプト」の検討

人々がどのような景観を好むのかを絵や写真を元に調査したKaplan (1983)によると、概して、建物がたくさんあるようなところよりも川の流れや木々のある風景が好まれるという。また、とくに子どもたち(8-11歳)を対象としたBalling and Falk (1982)の調査では、アフリカのサバンナの風景がより好まれ、年齢と共に彼ら(北米の子どもたち)になじみのある広葉樹林についても好みが高まった

*3。 Kahn (1999 : p.22-23) は、これらの「好みの景観」調査によって、おそらく人類の祖先がアフリカのサバンナにふるさとを持つことと関連があると結論し、好まれるこれらの景観や景観要素は、人々の心理に強く影響していると報告している。

この一連の調査で興味深いのは、自然の好みの程度を測定するのに、「視覚情報」を使っているという点である。実際の自然にふれることなく、「写真や絵」を刺激として与えて、その結果を問うという手法が、やはり「イメージとしての」「象徴としての」自然を相手にしており、本当に自然と関わることの好みを問うてはいない。つまり、景観は2次元的視覚情報におきかえることができ、そのような視覚情報が他感覚をも代表するだろうという「前提」がある。もちろん前提を疑うことも必要かもしれないが、しかし、まずこの前提を認めた上で、話を進めよう。人々にはそれぞれ好みの自然のイメージとがあること、あるいはシンボルとしての自然物への好みがあることは確からしい。人間は、やはり自分の中に持つ「好きな自然」という何らかのイメージをもちつつ、そのイメージと対比させながら自然と関わり合うという特徴を持つのであろう。このことは、以下の点で重要である。

視覚的に好まれる自然や、一見、人工物からなっているとはわからないような自然景観を見ることができ、そこに生きている動物を見いだせば、まずそこで、檻やコンクリートの中にいる動物を見る体験とは異なる体験をすることになる。コンクリートで囲まれた場よりも「自分にとって好ましい」場所を見ることがなるからである。さらに、好ましい景観を眺めながら、その中に生きている動物を見るという体験は、イメージとして自分が好む自然を「眺める」だけではなく、実際に動物が生活する場としての自然に自分も「入り込む」感覚を、視覚情報（それはあたかもそこに自分がいると想像させるに足る視覚情報であればの話だが）を手がかりに、持ち得ることができる。自分を外に置く「眺める対象」としての自然から、たしかに「生命」の営みの場に自分が接しているという実感を伴うような、「自分の身が入り込んだように感じる」自然となるのである。ここには、展示の諸要素を利用して、展示を見る人々自身が自分の内側に創り上げてもらう「展示観覧体験」が成立することが期待されている。

これまでたしかに、擬似自然の環境を精巧に作り上げ、そこに動物を置くとい

う旧来ハーゲンバック時代にさかのぼれるような、自然的な展示法はあったけれども、その展示法との根本的な違いを、Coe(1998 : p.167-174)は次のように述べる。

擬岩や、一般的な植え込みなどは、ときに檻や壁でできた運動場と対照的な「自然的」という言葉で表されてきたが、自然的展示は、動物の特殊な生息地を再現し、再構築するところみだ。しかし、博物館でのジオラマのように、実は、見ている人はこのセットの傍観者であり続ける。
(略) 一方、イマージョン展示は、観覧者をまるで生息地にいるような気持ちを作り上げるような場所を用意する。

しかし、この「傍観者」から「生息地にいるような気持ち」を持つ存在に変化することこそ、それぞれの価値観に基づいてその展示を「どう見るか」という、それぞれの主体性能動性の発揮そのものなのである。展示の諸要素をつなぎ合わせて、生息地を想像し、そこに自分の身があるように感じるかどうかは、実は、「浸しこまれる」ような受動的なことではなく、すぐれて積極的な「展示の見方」によるのではなからうか。

つまり、イマージョン展示の重要な意図とは、本来、傍観者ではない能動的な「見る人」を作り上げるというものだと思筆者は考える。コーが詳しく紹介しているところによると*4、ブラウンウィンとフォードによる「新しくできた豊かで自然的な環境での展示」とそれ以前のゴリラの展示とを比較した来園者調査がこのことを支持している。簡単にまとめると、メルボルン動物園では、両方の展示を訪れた 1614 名の学生に対する質問紙調査を行った。年齢により、態度や興味はさまざまだったが、新しい展示を訪れた学生たちは、生態的なプロセスがよくわかるようになったこと、また、生息地保護の必要性を認めたことが示唆された。そして野生のゴリラ研究の価値についてポジティブな反応をひきおこしたという。また、他の古い平凡な展示に比べ、より多くの「各々が自然保護に対して何か言及する」反応が得られた。また、自然的な放飼場にいるゴリラを見た学生は、動物園に対する態度もポジティブであった、という。

もちろん、このようなポジティブな反応が、実際にどのような記憶として残り、

その後の自然保護への具体的とりくみにどう関連するのかという実際の行動まで含めなければ、動物園の展示の意義がないのではないかという反論もあろう。

それに対しては、Seidensticker and Doherty (1998 : p.180-190) による次の主張が参考になる*5。

我々にとって、今日の動物園動物からのメッセージとは、来園者がエコロジーや行動を体験するということである。(略) 動物園の動物たちの手助けで、来園者は世界観や世の中における自分の位置の見方を身につけることができる。もっともっと来園者に動物たちをよく見てもらうよう我々は働きかけるべきである。

つまり、来園者の「見る」ことが、自然に対するよき態度を生み出す可能性があること、そう「働きかける」ことが動物園には求められるという主張なのである。ここには、来園者が受け取るメッセージは、展示それ自体あるいは展示動物から発せられるだけでなく、動物園展示者側の「働きかけ」によって初めて送られることであるという主張が読みとれる。筆者はこのことを次のように理解する。単に、再現された生息環境に「浸らせる」のがこれらの新しい手法による展示の目的なのではなく、本来の目的は、「浸る」体験をする、あるいは、擬似的だが精巧に作られた展示を「見る」来園者たちに、展示者側が常に来園者に意図的にメッセージを届けようと「働きかける」なかで、自主的に読みとってもらうことなのである。

しかも、絶対の安全の元にながら、「動物と、その動物が暮らしているはずの環境」をイメージとして取り入れるという「体験」は、動物園ならではの体験であろう。それは、野生動物が野生の中で暮らしている空間に実際に入り込んでいくわけではないことを自覚しながらのバーチャルな体験である。しかし、人間は「自分は安全である」という認識があるからこそ、そこに独自の解釈つまり、「自分にとってのそのバーチャル体験」の意味を自由に考えていける。視覚に頼りつつも、そこから「想像」という力のおかげで、世界を構築していけるのである。絶対の安全という環境がそれを許している。幼児が接近してくるゴリラをこわがると、大人は「こわくないよ」とコトバをかけながら、「おめめがかわいい

ね」などと安心させる場面がみられた。これも、絶対の安全への確信により、ゴリラを「こわくない動物」として子どもに教えることができるのである。

この点は動物園という公共の施設がもつ大きな役割と言えるだろう。つまり、誰もが安全な環境において、自由な時間を過ごし、想像力を駆使し、互いに自由に語り合える場を提供するのが動物園なのである。その話題にはもちろん、動物たちのこと、自然環境のこと、人類と野生動物の関係、地球の未来、などが登ることだろう。その際、目の前の実際に生きている展示動物や展示物、あるいは全体としての展示の雰囲気などが話題として取りあげられればられるほど、それらは来園者の記憶として残っていくにちがいない。そして重要なのは、それらの記憶が、どのように来園者の日常生活に影響を及ぼし、自然に対する態度として効果的に表れてくるのかであろう。これは今後の課題になる。

3-2 その種本来の行動特性再現を目指した「行動学的展示」の検討

ゴリラの生態展示のように、生息地を擬似した自然景観に近い展示では、人工的に見えるものはなるべく排除されていた（たとえセメントで作った擬木もほんものらしくしつらえてある）。あえて言えば、麻袋と段ボールくらいである。しかし、森林の機能を、丸太とロープの組み合わせで再現し、道具をつかっての採食風景を見せるというチンパンジーの新展示では、生態展示にはない「視覚の創出」をもたらしたと筆者はとらえる。たしかに、人工物の配置は生息地の自然の直接的な模倣ではない。人々が好むような自然景観がそこに見られるわけでもない。しかし、丸太とロープは、チンパンジーにとっては「登って、遊んで、辺りを見回せる場」であり、枝を使つてのジュースなめは、シロアリ採食の際の道具使いの「人工的再現」である。これらは、チンパンジーに備わるそもそもの行動を発現させる環境の諸要素である。すなわち、人間の視覚には「生息地の自然」「好みの自然」とは映らなくても、チンパンジーにとっては高い木のある場所であり、道具を工夫して食べ物を得ることのできる場なのである。

もうひとつの特徴は、数十cmのところ、チンパンジーの表情やマニピュレーションを見ることができるといふ点である。子どもは、間近で動物の表情を見たり、能力を知ることができると、その行動の特徴を驚きと尊敬をもって見つめる。

子どもの感じ方を手がかりにして、大人も、そのように動物を見るのがうながされる。子どもの発話に助けられ、それに対するうなずきという形をとって、大人も動物の能力を知るのである。もちろん、逆もある。コトバもなく見つめている子どもに、「すごいね。よくできるね」と声をかけてあげれば、「やっぱりすごいことなんだ」と思える。もし、野生の環境とそこで自立した生活を営める動物たちの能力がどういうものであるか想像することができれば、動物への尊敬はまた違ったとらえ方をされるだろう。たとえば、単に「人間にできないことができるからすごい」あるいは「人間みたいなこともできるからすごい」というとらえ方は、それが「野生における生活や社会生活の成り立ちを支える」能力であるということに結びつくことによって、「野生」という自立した生活への尊敬が生まれるのだと思われる。

このチンパンジーの展示では、人工的な展示物である丸太とロープ使用によって、来園者から見て奥側の「森」（実際に木を植栽してそれを生長させていく計画がある）の育成が可能になり、将来は、「森」と「手前の人工物」両方の利用がバランスよくなされることが目指されている。もちろん、そうなるためには、チンパンジー自身の活動をよく観察して、そのバランスを作り出せるのかどうかという管理者側の手腕にもよるであろう。また、個体差による活動場所の選択性も大きく影響するであろう。しかし、行動の特徴が間近でよく見え、また時には、森の中で過ごす姿が見られる。そのバランスが作り出せれば、この展示の展示意図すなわち「行動や表情をじっくりと見て動物への驚きや味が深まり、しかも本来の生息環境のイメージが作られる」は、表現されることとなる。

もともと、動物の行動に重点を置いた展示手法は、そこで本来の行動が見られること自体に価値をおいていた。エソロジスト（動物の行動科学者）の研究成果が動物園の展示に生かされることが目指されたのである。本来、エソロジーという研究は、それが野生動物を対象としたとき、実際の環境において、動物の行動が彼らの環境のどのような諸要素と結びついてどのように適応的進化が進められ進んでいるかを明らかにする研究である。したがって、生活ができるだけその種本来の野生状態と異なることをよしとすることである。この立場で動物園の野生動物の飼育と展示を改良しようとした最も初期の人物は、ヘディガー(1950)であった。彼は、自然の中で動物におきているものに近い効果を飼育下で求めた。

人間の目に自然的に見えるかどうかよりも、動物がそれ自身に備わった環境への適応的進化の産物である「行動様式」が、その飼育環境下で再現できるかどうかを問題とした。

しかしながら、「人工的な環境下での飼育」という条件と「人々に見せる」目的をもつ動物園で、本来の行動様式が再現されることそれ自体の「有益性」とは、いったいどのように考えればよいのだろうか。「飼育条件の整備」という点で言えば、動物の苦痛を取り除くという、ビクトリア時代のイギリスに萌芽を持つ「動物福祉」の思想にさかのぼれる。それは、人間と共通の「痛みや苦しみ」をもつはずの動物たちを「野蛮でない人間ならば、動物をどう扱うべきか」というまさに「人間から野蛮さを取り除く」ということに価値をおくということだった。檻の中の野生動物の扱いにもその義務感が広がって、動物園の飼育動物にとっても福祉の充実が重視されたのである。動物のためという「動物福祉」は、極論を言えば、「それを飼う人間の人間らしさの追求」という「人間のため」である。動物が幸せ（そう）に飼育されていることを知ることができれば、それは「人間の奥底に潜む野蛮さ、文明人にあってはならない野蛮さ」から解放される。その、いわば人間中心的思想を土台とした動物の福祉への関心だったのである。しかし、その人間中心的思想を出発点にしたとしても、人々が、動物の種本来の行動様式が展開されることに価値を見いだしてきたのも明らかである。筆者は、さらに「本来の行動様式がその環境下で展開されるような環境整備を行おうとする人間の意志に価値を置く」ことを通じて、野生動物への尊敬の念、あるいは野生動物が野生での生活を独立して営んでいることへの価値観が新たに作られているのではないかと考える。

このことは、「展示されている動物」を見に来る人々にとっても重要であろう。たとえば、「猛獣」という言葉でひとくくりにされているいわば固定的なイメージしか持てなかった動物が、本来の生活の一部を見せてくれ、その「見た体験」を通じて、自分の中の「猛獣」の概念が作り替えられていくという経験をすることもあるだろう。

誰もが、できれば活動的で生き生きとした動物を見に来たいと思っているだろうし、そのしぐさの意味というものを理解したいと思っている人も多だろう。

だが、「どうしてそういう飼育環境の整備や工夫によって、本来の行動が展開

されるのか、またそれは、動物のよりましな生活に役立っているとどうして言えるのか」も同時に知らされない限り、動物園に「動物を見に来る」人々にはその有益性や価値観は伝わらない。つまり、その「飼育環境整備をしようとする人間の意志に関心を持つ」ことによってもまた、動物への尊敬の念は作り出される可能性がある」と指摘したい。そこには、環境整備に携わる人々自身にも、その目的を伝えようとする努力がなければなるまい。

人工的な環境で、「見られる」ことを前提とした、より動物の幸せな生活にも役立つような工夫を生み出す「意志」には、もちろん、その時代の社会が求めることが反映されるが、同時に、「動物をどう見たらよいのか」という見る態度や価値観の構築にも、「動物展示の方法に関する情報」は大きな影響を与えうるのではないかと筆者は考える。

来園者が思わず口にした「すごいね」が、動物の行動を見ながら発せられたとしたら、その発話をもたらしたその動物自身の行動欲求と同時に、その発現を可能にした展示の要素によるものであり、かつ、その要素を取り入れた展示方法にも依存するということが、来園者に知らせることが重要なのである。

3-3 来園者の「あらたな視覚」を生み出す条件としての展示法と、 展示のあらたな見方を生み出す来園者の能動性

生態展示のコンセプトにしても、環境エンリッチメントによる行動学的展示のコンセプトにしても、来園者の新たな「視覚」を生み出すというものである。「今だ見たことのない生息地の想像」「展示動物の行動からの野生生活を想像」というように。

しかしながら、動物園以外の展示のデザインのコンセプトの歴史的展開を振り返ってみると、展示物に何かを語らせるという視覚のみを重視した傾向への批判は、受けとめる人々自身の主体的な探索行動はどう生み出されるのか、という、来館者自身の意味創出への主体性を重視するという立場から始まったのであった。つまり、主体的探索者、来館者中心の考え方はまさに自ら情報を収集するという能動的な存在として来館者をとらえるというものであった。筆者の考えでは、展示から情報を主体的に収集するという「能動性」は、もうひとつの側面として、

情報の発信者から発せられたメッセージ自体を批判的に検討して、新たな観点からメッセージを作り直すという「能動性」を内包するものでなければならない。

展示する側とそれを享受する側とに分かれて前者から後者に「展示意図」が正しく伝わるかという問題設定自体を問い直し、「意図」自体も不動のものではなく、両者によってどのように新たに生み出されていくのかという問題設定を検討すべきなのである。このことを動物展示についても考えてみよう。

たとえば、ランドスケープ・イマジジョンの考え方に基づく展示手法の変化について、若生(1999:p.7)は次のように述べている。

原生自然の再現に重点が置かれていた展示は、動物の生息地と人間生活との関係に焦点が当てられるようになり（略）現地調査の研究センターから動物を観察する等の変化が見られる（略）動物を配しないインタープリテーションのみで構成された展示も表れている。

人間中心主義から生命中心主義への転換という時代の流れの中で生まれたランドスケープ・イマジジョンの考え方は、生まれてまもなく、生命に対する人間の責任という問題意識を掘り起こすような展示手法への転換も含みながら、多様な展開を見せるようになった。まさに、展示意図は社会と共に変わり、ここに紹介したように、生きている動物を配置しないで、動物とその生息環境に対する知的関心を喚起する試みとその可能性への挑戦も始まっているのである。

人間は、五感の中でも視覚の発達した動物である。ものごとの認識が「視覚」から始まる場合はたいへん多い。ものの空間的位置やその時間的配置の変化などを記憶する場合は視覚に頼るし、何か考える場合にも、「イメージ」とか「モデル」など、視覚的なものを手がかりにすることは多いと思われる。そうした人間の認識特性は、博物館展示の始まりと共に、効果的展示手法の開発にたしかに生かされてきたが、それと同時に、我々人間の「視覚に依拠することの多い認識特性」が、「展示」によって変化していくことも、生み出されてきた。ここにみた、「生き物の配置をしない動物園展示」手法は、「動物に何かを語らせる」手法から、「野生動物の生息地の擬似自然を眺めさせる」手法（そこに実際に飼育されている動物は、かいま見せる程度）へと変化し、やがて「生息地を調査し守ろう

とする人間の活動の拠点を再現して見せる」手法の登場（生きている動物を展示しない）にまで変化した。これらは否応なく、動物園来園者の「視覚的認識」のしかたに挑戦するものとなる。それを体験した来園者は、長い間「動物園は動物を見に来るところ」であったにもかかわらず、「生息地の自然状況を思い浮かべ」、そして「動物たちの保護がどのような活動によってなされてきたのか」を展示に依拠しながら「想像する」力が来園者自身にも求められているのである。

一方、行動学的展示は、「その動物本来の行動を人工的な環境下で誘発させ、その行動を事実として見せる」手法である。もちろん、根底には野生動物の理解や動物たちへの尊敬の念を生み出すを目標としており、その点では、人間中心主義から生命中心主義への移行という流れはランドスケープ・イマージョンと共通する。しかし、行動を間近に見てもらおうとする意図とそれに基づく展示手法は大きく異なる。来園者が「行動を見る」という行為は、動物への理解にどう結びつくのか、野生で実際におきていることをどう知ることができるのか、行動学的展示は、その出発点が「動物の福祉」であったことを考えると、野生の理解には何らかのステップが必要だということになる。

ランドスケープ・イマージョンは、「大がかりなジオラマとその構成物のひとつとしての動物」を展示する方向に、行動学的展示は人工的環境下で「野生生活でのその種ならではの行動目録の忠実な再現」を展示する方向に向かっている。来園者自身が能動的探索者として展示構成に重要な役割があるという立場に立つなら、それぞれの目指す方向は、来園者の「新たな見方」の創出とともに、おのずと展開されるものだろう。「受け取り手」ではなく、自ら展示の意味を解釈して自分のものとしていくという、来園者の「見方」がどう創られているのかを知ることは、展示者側の直接的意図とは独立した当該展示の役割を、来園者の見方の創出に則して発見することでもある。

この来園者独自の見方の発見こそが、動物展示のあり方に光を投げかける。そして、来園者層の多くが幼児や子どもを含む家族連れであることを考慮すると、年少の来園者が「主体的に展示を見る」その能動性がどう発揮されるかについて、より深い研究が進められるべきであろう。この点に関して第三章、IV章の観察・インタビュー・実験からの示唆は以下のとおりである。

①幼児にみられる「呼びかけ」や「まね」などの言動は、展示動物への近しい

感情の積極的な表現であると筆者はとらえる。とくに、動物のコドモやアカンボウがいると、幼児はその個体に関心が集中し、まるで自分がその個体の近くにいるような感覚を持つことがあり、自分の感情と相手の気分とが入り交じった表現をとる場合がある。小学生になると、その個体と個体を取り巻く社会関係にも興味関心が広がり、見ている対象が「見られている」ことを意識しつつ自分の経験を動物行動の理解や気分の想像に使う。近しい存在として親しみを感じ、周囲からの支援があれば（「どのような気分だろうか？」と質問されれば）「見る---見られる」関係を認識しつつ、「見られている」動物の立場を理解しようとする傾向が生まれる。同時に、7歳を過ぎると「見られていること」を含んだ同情心が芽生えてくる。発話されたコトバとしては擬人的表現や同情的表現が増える（ただし、本調査ではゴリラについての傾向）。

つまり、展示動物を展示動物のひとつとして単に眺めるような見方をするのではなく、自分の感情的交流の「相手」として関わることがその年齢なりにでき、それが年少者の「主体的に展示を見る」ことだと考える。

②野生の生息地など「見えないこと」の想像は、幼児や小学校低学年児童では難しい。むしろ、展示場の中の配置物（岩・布きれ・木ぎれ・枝・水）とその動物の直接的な関係、すなわち「実際にそれらをどう使うか、それらとどう関わるか、何をしているのか」という具体的活動に興味を持つ点に、能動的な探索態度を見いだせる。「本当はどういうところに暮らしているのか」は、「目の前に見た事実」の延長として考えざるを得ず、事実としての具体的活動を「見えない野生の生息地想像」につなげる働きかけが必要である。全体的なイメージを創り上げていくのは、たとえば、展示場の配置物が野生生活でいうところの何の代替物であるのか、口にしている餌はなぜ野生生活での食べ物の代替物と言えるのかなど、他の情報を織り交ぜた年長者からの支援を必要とする。

③チンパンジー新展示の展示館で見られたように、幼児でも小学生でも自分の知っているあるいは理解しやすい展示物または興味引かれる展示物（実物大レリーフや骨格標本・道具類）を見ると、積極的にそれらと関わりを持とうとする。幼児はたとえば類人猿の手のレリーフに自分の手を重ねるだけでなく、いっしょにいる親の手をもってきて重ねさせたり自分の背丈と類人猿の大きさを比べるよう要求するなどの積極性を見せた。小学生くらいになると、比べている様子を写

真に撮るよう親に要求したり、自分から解説を読んで親に聞かせる場面もみられた。親にも、そのような子どもたちの積極性に応じた行動が旧展示に比べて数多くみられた。これらの頻繁な社会的やりとりが生じた解説物配置の展示館は、子どもたちの積極的な探索活動を引きおこしており、その積極性がいっしょにいる親の行動にも影響したといえる。

4節 新しい展示法に対する来園者の意見

4-1 ゴリラ生態展示に対する来園者の意見と解説員の意見

来園者自身はこれらの新しい展示法の試みに対してどのような意見・感想を持ったのだろうか。第9章では、それを扱い、ボランティアの展示解説者の意見とも対照させた。ゴリラ生態展示が、岩や擬木の配置が複雑で、全体に暗く、見つけようと努力しないと見えないという意見はあったけれども、従来の展示法に比較した新しい展示法への支持は高かった。もちろん、意見の中には「新しいのだからそれなりの工夫がされているはずで、動物にもよいはず」という類推によるものや、「わからない」という回答もあった。しかし、回答した来園者自身の「展示の良さ」の判断基準とは、「間近に見えること」と「自然らしく見せていること」であった。どちらの基準も、展示意図に関連したものである。

実際のインタビューでは、「ゴリラにとってその展示環境はどうか」について深く問うことはせず、全体の印象としての「よさ、悪さ」を問うた。「檻の展示や、柵の向こう側にゴリラがいた以前の展示のしかたと比べて」という比較の観点を与えたために、「展示を見る側の立場」のみを基準とするような回答が多く得られた可能性はある。しかし、生態展示を2回以上見ている来園者のうち数組は、「『自然ぽさ』がゴリラにとっては本当はどうかかわからない」と答えており、ゴリラの立場を含めての展示評価を自主的に下すことができた。「ゴリラの森」を2回以上見たことがある来園者が、この生態展示を「よい」と評価した割合がやや減少したのは、『自然ぽさ』をゴリラの立場から再評価し、疑問を持ったからだと考えられる。

この生態展示に関しては、第9章で明らかになったように、上野動物園ボラン

ティア解説員による「来園者にとってのゴリラ展示の長所と短所」の指摘が、来園者の意見と一致したことは強調してよいと考える。日頃、来園者の立場を経験しながら言葉を交わし、子どもたちと関わる仕事に携わっているその経験が、おそらくその一致をもたらしたのであろう。

4-2 チンパンジー新展示に対する来園者の意見

また、チンパンジー新展示では「間近で道具づかいや表情をみることができる」「広い」「チンパンジーが遊べるものがある」「解説物（道具説明や実物大レリーフなど）の豊富な展示館の併設」などが「よさ」の主な理由であった。発話の出現割合から判断する限り、間近さや、解説物の豊富さは、それをいっしょに見て、「事実指摘」をしたり互いに展示を見るようながすなど、親子が語りあえる条件の増加を示している。大人が子どもにそれを読んであげたり、逆に子どもが説明を大人にするなどのやりとりの頻度を高めることでもあった。つまり、来園者側自身にとっての「よさ」の評価である。一方、「広さ」「チンパンジーが遊べるもの」は、動物にとってのよさが評価の観点となっている。

チンパンジー新展示では、ゴリラ生態展示と異なり、「見ている側にとっての評価の観点」と「そこで飼育されている動物にとっての評価の観点」を明確に質問の中で分けながら意見を聞いた。そのため、「たとえそこにチンパンジーをたくさん見ることができなくても、チンパンジーにとっては十分な運動のできる展示環境がよい」と判断した回答ができたのだと考えられる。

親子連れのうち大人の来園者は、見る（利用する）立場と見られる動物の立場の両方の観点を持ち合わせることができ、子どもといっしょに動物を見たり展示物利用ができること自体への期待と、飼育展示されている動物の側にたってその展示法が動物にとってよりよくなることを願っている。これら二つの観点からの判断を基準に、チンパンジー展示については全体として新展示法の支持の高さが得られたと考えられる。

以上のように、どちらの展示にしても、親子連れ来園者の多く（親）は、新しい展示法をよいと判断している。その判断基準をあらかじめ細かく設定してイン

タビューしたわけではなく、「なんとなく」あるいは「どちらかという」というあいまいなものも含まれてはいたが、それでも、展示意図に関連した諸点を含めて評価していた点は、今後、来園者の意見をよりよく聞きながら、どのような展示が望まれるのかを精査していくことの意義を示すものであろう。

4-3 一般的に来園者が動物園と展示に求めること

来園者が求めることは何かについての調査は、これまでいろいろな観点からさまざまな規模でなされてきた。たとえば、Russell and Pratt (1980)は、その場所の過ごしやすさの質が動物園の可能性を高める要素だとした。そこでの「過ごしやすさ」とは、休憩所、トイレや売店を含む全体の雰囲気など、かなり広い意味での快適さを意味している。

展示の諸要素についての来園者の要望も調査された例がある。Churchman and Marcoulides (1993)は、メルボルン動物園（オーストラリア）における調査で、「動物の行動が見えること」「見渡せること」が、現在の来園者にもっとも重要な展示観覧の要求であると述べている。彼らは、動物展示デザイナーのPolakowski(1987)が主張した「自然らしい雰囲気をもつ展示 (Naturalistic Exhibits)」よりも、来園者は接近して動物が見えることを「自分たちの望む展示」として評価したという。つまり、展示者側の考える「よい展示」は、一般の来園者にあまり受け入れられていないという結果である。

より具体的な展示法についての意見を聞いた調査もある。たとえば、ジャージー動物園（イギリス）では、子どもを含む家族連れの来園者が、マーモセット（南米の小形のサル）類の檻式展示と、放養式（檻や柵を使わない）展示とをどう評価するかを調査した。その結果によると、来園者（回答は大人）は、「子どもに動物の形態を説明するのには、檻式展示の方が近づいて見られるからよいが、動物のためには檻でない方がいい」とした意見、「少ししか姿が見られないが、檻でない展示がいい」という意見が多く得られている (Coffey, 1995)。

これらの一見矛盾する結果を、筆者は次のように解釈する。

動物園が、ある動物を詳しく見に来るところだとすれば、「対象物がよく見えること」がよいということになるだろう。子どもに何かを見せたい知らせたいという具体的な目的があって、それを基準に展示法のよしあしを判断するなら、知らせたい事が動物の形態の特徴なのか、生息環境なのか、行動の特徴なのかによって判断は異なる。しかし、動物園という非日常の特殊な場に身を置いて、その雰囲気味わうことが主な目的だとすれば、全体として見渡せることや風景などが判断の基準となるにちがいない。

また、動物園来園者の多くが家族連れであり、来園目的が家族同士の交流であるということを見ると、あらかじめ動物園の「これこれを見に来た」という動機が明確に自覚されているわけではなく、その家族連れにとっては、来てみて新しい発見をしたり楽しみを見いだすことが多いと思われる。だから、上記の調査結果は矛盾ではなく、来園者の具体的な要望から漠然とした期待までの多様な求めと対応した、「よさ」が語られているのだと考えられる。

だが、展示者側として、もし来園者の求めを知りたいのであれば、来園動機や展示利用の目的とあわせた調査をしなければならない。その上で、それぞれの展示の特徴や総体としての動物園の雰囲気が来園者にどう受けとめられているのかを知るべきであろう。そしてさらに、前述のように、来園者は「生きている展示動物」の生活の質にも自主的に言及できるという点を信頼して、来園者の求めと来園者からの評価を受けとめていくべきだと考える。

このような立場からすると、本研究で得られた「来園者からの意見」は、来園動機・展示観覧の動機と関連させた分析を行っていないため、傾向がつかめただけに過ぎない。インタビューも、「この展示法は良いか悪いか」という聞き方ではなく、「〇〇を期待していたことに対して『期待どうりかどうか』」と訊ねるような調査方法を採用すれば、より具体的な評価が得られたと考えられる。

さらに、展示法に対する意見は、展示者側として計画された改良点が来園者から見てどのように受けとめられているのか、のみならず、意見の中に、来園者の求めることが含まれているのだということも、指摘しておいてよいだろう。くりかえしになるが、こうした来園者の率直な意見は、「インタビュー調査」という方法だけでなく、日常的に来園者に接する機会を持つような、たとえば上野動物

園のボランティア解説員のような人々との話し合いなどから、引き出すことも十分可能である点も指摘しておきたい。

5節 来園者の展示観覧体験を理解するための枠組み:仮説的提示

このように、異年齢の組み合わせである「家族連れ」の間で、動物を見ながら交わされる言語的やりとりは、表現方法・理解のしかた・関心の持ち方などの異なり具合と、展示手法の違いとのからみあいによって、複雑に展開する。その複雑さはどうとらえられるべきだろうか。もちろん、この複雑さを単に「現象」としてとらえるのではなく、あくまで「動物園における動物展示を見る」という体験を、「動物の理解」の展開として展示者側がどう理解し、展示方法や解説のあり方にどう生かすかという立場からの「整理」が必要であろう。すなわち、年齢の影響を含め、展示観覧体験の多様さを「学び」の観点から分類・整理する視点である。

その整理をする上で、筆者は、無籐（2001）の「学習の三つのモード」参考にしようとする。無籐は、「保育では、子どもは、園の中で生活を営み、活動し、遊んでいる。その遊びの中に学びをいかにとらえるか。それが保育の理論的実践的課題の中心である。」として、生活の中での学びのとらえ方を重視している。実際に日常の中でおきていることをよく見て、その中に人間としての成長を「学び」としてとらえることを提唱し、その目的は「保育」のよりよい実践にある。筆者は、同様に動物園における幼児を含む家族連れの「学び」の実態をとらえて、動物園側としてその学びを理解し、展示法の工夫を含めた教育的な働きかけに生かしていくことをめざす立場である。動物園を家族で訪れることは、もちろん、家族同士の楽しみのためであり、遊びの要素も大きい。しかし、その楽しみや遊びの中で、たしかに人々は相手を認め合い、認め合う背景に、多くの事実との出会いとそれに基づく学びが存在しているのである。この点を、理論的基盤のもとに考察していくことが必要であると考え。

さて、上記の「三つのモード」とは、①入り込む学び、②眺める学び、③想像力による学び、である。「入り込む学び」とは、「その場に入り、一定の時間を過ごし、また繰り返しその場に出かけ、またその場で動き回って活動し、その場

の中の諸々のものについて、いろいろな角度から関わりつつ見ていくものである」とされる。「眺める学び」とは、「全面的な関わりを止めて、ある感覚に焦点を合わせ、そこだけで対象をとらえようとする」ことである。関わりを止めて、たとえば見ることに集中すると、仔細に見ることが可能になる」ような学びであり、また、「想像力による学び」とは、「とくに他者の言葉を介して経験を広げることである。（略）他者の活動の様子や語りからその人の経験を想像し、（略）自分で経験のしようのないことを多く想像によって経験できる」こととされている（前出 p.266）。

筆者は、生きている動物を「展示」において見るという、動物園における特殊な「見る」体験には、このような無籐の「学びの三つのモード」に対応した展示観覧のしかたが、年齢に応じて表れるのではないかと考える。ひとつめは、はじめに全体を見渡してそこがいったい何の展示であるのかを確かめるような「眺める」という展示観覧の方法、二つめは、その眺めの中で自分の興味の対象を探し当て、そこに興味を集中させ、そこに入り込んでいくような「見入る」という方法、そして、見ている対象からいったん離れ、他者との言語的なやりとりを通じて、そこには直接見えはしないが、自分の体験を超えイメージを拓けるような「想像する」方法である。

子どもを連れている大人にとっては、見通しが利いて全体を見渡せることが「展示を理解する上でまず必要な観覧体験」とされるであろう。いっしょにいる自分の子どもに何か知らせたい、どこに動物がいて何をしているか教えたいという動機が、「一体何がどこに展示されているのか、ここでは何を見ることができなのか」といった全体を眺める観覧のしかたに結びつくのであろう。

しかし、子どもとくに幼児は、本調査でも確認されたように、まず、自分の興味の対象に集中していく。そして、いったん集中してしまうと、その中にまるで入り込んでしまっているかのような反応をみせることがある。大人に声をかけられるまで、「魅入られている」ような集中ぶりである。いっしょにいる大人は、そのような集中ぶりにむしろ触発されて、その興味の対象に自分の関心を寄せていく。

そのとき、子どもは自分の体験を思い起こしつつ、さまざまな想像をめぐらせているにちがいない。しかしその想像は、あくまで自分の体に刻み込まれた「活

動」に基づくものであり、大人が言語の助けを借りて想像する、イメージを思い浮かべることとは異なると考えられる。たとえば、子どもは「野生」を想像することはできない。がしかし、そこにいる動物の気持ちを想像することは可能なのである。「おやつをもらわないで（がまんして）えらい」という発話は、まさに動物の身に自分が入り込んで、そのときの気持ちを想像している表れなのである。

こうした、学びのモードの分類を参考に、筆者は、動物展示の「見方」を、子どもの年齢や親子間相互の実際のやりとりを参考に、以下のとおり①見渡す、②じっくりと見入る、③見えないことを想像して価値づける、の三つに分類し、それを展示観覧体験を理解する手がかりとして仮説的に提示する。

5-1 見渡すこと

ゴリラ生態展示も、チンパンジー新展示も、その展示意図は、それまでの展示よりは動物の自然な行動が多く引き出され、それを間近で見せるということであった。ゴリラの場合は、その自然な行動が「より自然に見える展示」のなかで観察されうるし、チンパンジーの場合は、その自然な行動が「森林を象徴するような高いポールとはり巡らされたロープ、ジャングルジムのように組まれた丸太等の構造物」利用により、より多く観察されうる。

しかしながら、飼育環境の整備によって、その動物本来の行動が客観的に「おきる」ことと、実際に来園者が「見ることができる」こととは異なる。来園者が実際に「見たこと」が「来園者が展示を見る体験」なのである。当たり前のことだが、この点は注意を要するだろう。

たとえば、ゴリラの「巣作り行動」は、巣材の整備や個体別の巣作りの場所確保などにより、たしかにその行動頻度が高められた。しかし、来園者がその行動を実際に見られる割合が多くなるかどうかは、その行動をとっている個体の位置の発見のしやすさ（のぞき込まなくても一望できるかどうか、明るさ、人だかりなど、発見までの所用時間等の複雑な要素が関係する）に大きく依存していると思われる。もし、ある一個体のひとつの行動を発見するのに時間を要し、それについていろいろと家族同士で話が進めば、気がつくと後から来た他の来園者に場所を譲るべき時間になってしまうことはよくある。

ゴリラの生態展示での家族連れの様子を観察していて、筆者は子どもたちが動物を見つけることがとても難しいことを実感した。オープン展示では、ななめ上方のどこかに、黒い大きな動物が居るのですぐにそれが見るべき動物だとわかる。しかし、生態展示では、限られた覗き窓から、擬木の影や木々の向こう側のゴリラを見つけることが困難であった。逆に、たまたま、そのガラス窓のすぐそばにゴリラが居て、「ほらそこにいるよ」と指さされても、それが「目指すゴリラ」という実感はすぐには得られないようだった。近すぎで最初はわからない幼児もいるのである。もちろん、いったん発見した後は、いろいろと発話が聞かれ、間近さゆえに興味を持たれている様子が数多くあった。その点は差し引いても、子ども、とくに幼児にとっては、遮るものがないということと、見渡せるということが、動物発見のしやすさ・比べやすさをもたらす条件であると思われた。

その点、全体を見渡せる従来のオープン展示は一目瞭然である。どこで何をしているか、まず発見がしやすく、見つけるのに費やす時間が短ければ、より多くの行動を見ることができであろう。全体を眺め、見渡せることの有利さは、「見つけるための時間」を省いてより多くの事実に出会えるという有利さとも言える。来園者のインタビューでも、従来式の方が見つけやすいからよいという答えが得られたのはそのことを指すと思われる。

では、全体を見渡せることの有利さは、手間いらずということだけだろうか？ 筆者は、もうひとつ、「個体同士の間におきることを見たり、個体と個体を比べやすい」という点での有利さをあげたいと考える。たとえば、あるチンパンジーが他個体と小競り合いをして、相手を追いかけていった先で何がおきるのか、その個体同士の関係を一望できる。あるいは、たとえば巣作り用の小枝を集めようとして、隣で横になっているゴリラの近くから失敬しようとして相手の様子をうかがっているときなど、窓越しの観察では、角度によっては死角がたくさんあって見えないことがある。また、向こうからゴリラがやってきて、来園者の前を横切るが、そのあとどこに行ったか、他のゴリラとどう距離をとりながら移動しているのか、それを追いつけることが、生態展示などではできないこともある。

しかし、7歳以上の子どもの発話のなかで、最も特徴的であった、「印象」の下位カテゴリー「擬人的表現」が生態展示を見ているときよりも有意に多いこと、「同情的表現」が多いことを、どのように考えたらよいただろうか。筆者は、この

眺めやすさもゴリラへの擬人的表現や同情的表現に結びついていると考える。

「テレビ見ているお父さんみたい」「なんだかいじけちゃってるよ」「つまらなそうだね」「見られていやなんだね」などの表現は、生態展示ではほとんど聞かれなかった。ゴリラ自身の特徴、すなわち、発声や頻繁な動きもなく、表情もわかりにくいという点も影響したであろうが、隠れ場といえれば小さな岩陰しかなく、静かに座ったり横になっているゴリラに対し、人間のもの悲しい姿を投影して、同情心をもちがちなのだと考えられる。同様な傾向は大人にも見られ、年齢が上がるにしたがって、眺めやすさの持つ二面性（見渡せることで動物の特徴を瞬時に知る事ができるが、同時に見つめられている動物を哀れんだり人間らしさを皮相的にあてはめがちであるという二面性）が表現されていくと考えられる。

5-2 じっくりと見入ること

一方、チンパンジーの新展示では、道具を使いながら採食している様子が見られる場所は、明るく、遮るものはないので、必ず数頭の個体を見ることができ、「見つけようとするための努力」はとくに不要であった。たしかに、オープン展示でみられたような個体同士の社会関係は見るのが難しくなったが、しかし、指の使い方や枝を穴に入れる器用さ、そして、真剣な表情をガラス越しに数十センチのところで観察できる工夫は、「興味を持ったしぐさ」として多くの家族連れが報告していて、特筆に値する。とくに、類人猿のマニピュレーション（手指の操作性）をクローズアップさせることは、非常に重要である。また、チンパンジーはいろいろなものを道具として器用に使えるが、手の親指の対向性がヒトほど発達していないために、親指の使い方がややぎこちない。その分、口唇まわりの筋肉は非常に発達していて、指の代わりをするくらいである。顔の筋肉の発達、表情を豊かにすることにも役立っており、このような手指や顔の特徴は、旧展示では、なかなか発見しにくく、観察も難しい。それが、新展示では手に取るようにわかり、チンパンジーへの呼びかけなども聞かれ、非常に近い気持ちをチンパンジーに寄せやすい展示法であるといえる。

また、小枝を運んできて、その枝の先を噛み、柔らかくし、人工アリ塚の小さな穴にそれを入れ、枝先についたジュースを舐めとるという一連の動作やそのと

きの手指や唇の使い方、表情を見るためには、ある程度集中して観察するという「時間」とそれを許す条件が必要となる。その点で、じっとその場を動かずに子どもが見ている間、大人はせかさなくてもよい状況にいななければならない。その子どもに、小さな妹や弟がいても、親はある程度の時間その妹や弟と近くで過ごせれば安心して、「あなたはゆっくりチンパンジーを見ていていいよ」と声をかけられる。大人の方もチンパンジーの様子に興味を持って見ていられれば、子どもの滞在を妨げるような働きかけ（もう行くよ、と声をかけて連れて行こうとするなど）はしなくてすむ。間近で時間をかけてじっくりと見ることができるといふ状況は、単に、「来園者がその気になれば見ていられる」ということではなく、小さな子どもを含むような場合は、とくに、その「見ていられる」状況がどう整備されるか、によって作り出されることなのである。

こうした「接近」が物理的にも時間的にも可能になり、動物の顔の表情や手指の器用さといった、人類進化のヒントにもなるような重要な情報を得ることができる、この「じっくり見る体験」の創出機能は、チンパンジーの新展示の成功面として高く評価されるべきであろう。

ところで、ゴリラにしてもチンパンジーにしても、展示手法にかかわらず、動物を見て何らかの印象を語り合う場面が数多くあった。印象というのは、人々の頭の中にあるそれまでの知識あるいはイメージと、目の前の動物の様子や展示物からの情報とを比べて発せられるコトバであるが、同時に、そこには人々の価値意識が反映している。たとえば、「すごい」と言えば、「思っていたよりも大きい」「自分よりずっと能力がある」というように、自分の中の何らかの基準を超えているという意味である。その基準を超えていることにある価値を見いだしたのである。「えらい」と言えば、「自分にはできないことができる」ので「えらい」と表現する。自分にはないものが動物にある、自分にはできそうもないことが動物にできる、それをプラスにとらえている表現は、動物への尊敬の気持ちを持つ上で重要な「価値意識の表れ」だと筆者はとらえる。

そのような価値意識の元に「印象」を語れるのは、動物をその飼育環境と共に見ることができ、しかも、単に一瞥するだけではなく、ある程度の時間をかけて見ることができると考えられる。目の前で見ている「事実」とそれまでの既知のことがらを突き合わせ、比較することにより、「印象」はコトバとなって

いっしょにいる誰かに報告され、時には同意を求める表現となる。だから、「一瞥」ではなく「時間をかけて見る」というのは、そうした内的プロセスを経ている時間をも意味しており、それは観察者からは「じっと見る」「集中して見る」という来園者の行動としてとらえられるのだろう。

3章5節のインタビュー結果で、子どもが大人に比べて「チンパンジーの頭数」を少なく見積もっている結果が出されているが、それにたいして、「子どもは対象に見入ってしまいがちで、展示全体を見渡すよりも、対象への興味に深く入り込みがちだからである」という解釈も成り立つだろう。また、ゴリラを「怖い」といいながらも、思わず足を止めて目を見つめてしまう幼児は、立ち止まらざるを得ないような引きつける力を感じて、見入ってしまうのである。

もちろん、一人ひとりが本当は何を感じているか、その詳細を知ることは本調査ではできなかった。しかし、少なくとも第三者の観察者からは、展示動物に「見入っている」場面があると見える。とりわけ、3歳くらいの幼児が動物たちに手を振ったり語りかけたりしながらじっと凝視しているところは、その展示場内に自分が入り込むような感じで見えるように見える。たとえば、「おーい。ごりらー、こんにちはー」と思わず呼びかけてしまうのは、ゴリラの一員として挨拶している気持ちの表れである。チンパンジーがタイヤで遊んでいるのを見て、「おれも遊ばっかなあ」とつぶやくときには、まるで自分がそのチンパンジーの隣にでもいるような気分になれるのである。そこには、大人が対象を外側から見るのとは異なる、「内側に入り込む」とでもいうか、自分の身を、見ている対象と同一の世界に置けるような「見方」ができるかのようである。

見渡して対象を比較したり、何がおきているかをざっと知るには、全体が見通せることが人間の理解のしかたを助けるものである。しかし、幼児は、対象に見入ってしまうので、その「見入っている対象」から離れて見渡してみるのは、限られた時間では難しい。一方、大人は子どもへの気配りや他の家族への配慮（あまり場所を独占できない）により、幼児のように集中して対象に見入ることはしにくい。逆に、そこでは見えないことを他の知識や手がかりを利用して子どもに話してあげることができる。この二つの見方の違いが重要だ。大人は、対象に見入ってしまう子どもの集中度に興味をそそられて、自分も関心を持とうとする。そして、何か手がかりがあれば、それをういながら、子どもの質問に対して、た

とえそれが「見えないこと」であっても、応じようとする。

5-3 見えないことを想像して価値づける

「見えないこと」の「見方」とはどういうことだろうか。この点について、親は、実際には動物の発見がしにくくても、動物にとって住みやすければそれは「よい展示」であると答えている。つまり、見えやすさを犠牲にしても、動物にとってよい環境を整えることに価値を置くという見方である。また、チンパンジーの新展示では、「見える個体数が少なくなったけれども、チンパンジーには広くなってよい、遊べる道具が増えてチンパンジーにとってよい」という価値判断が下されていた。ここにも、人間にとって見やすいという自己都合よりも、「見えにくくなくても、動物にとってよりよい飼育環境が整う方がよい」という価値観がみられる。この立場は、子どもが動物を探索するのに苦労している場合に、どうしてなかなか見えないのか（動物自身が、自分でいたい場所を選んでいるから）を、親自身が解説してあげるという可能性にも結びつくだろう。もちろんその場合は、見えないチンパンジーはどこにいるのか、そして「いたい場所を選べる」ことがチンパンジーにとってよいことである確証を示す必要がある。「見えているとき」以外のチンパンジーがどうしているか、子どもに解説してあげられるような情報がそれを助けるだろう。

さらに、「野生生息地の想像」についてのインタビュー結果が示したように、子どもは大人よりも、その具体的な展示物によって推測している割合が多かった。一方、親は、判でおしたように「ジャングル」や「森」と回答していた。サバンナという回答もあった（サバンナではなく森林がチンパンジーの生息環境）。つまり、生息地想像に使う情報は、子どもより親の方が「展示以外の情報」である率が高いのである。このことは、大人には誰にでも共通の「野生のチンパンジー」＝「森やジャングル」のイメージが存在するというを示唆する。逆にいえば、野生の生息地という、直接目には見えないことを想像する場合に、幼児であれば、「今見た事実」を手がかりにして

考えるしかないが、大人にとっては、「今見た事実」は自分の中の「野生生息地」のイメージを作り替えるほどのことではないということである。

つまり、子どもは年齢が低ければ、「目の前の事実」から出発するが、大人は自分のイメージから出発し、見ていることによりイメージを確認したり、イメージと対比させてもの事を知っていくことが多いということである。しかも、一定のイメージが先にあるということは、見えていることを評価しつつ見るということである。目の前では実際には見えないことを子どもに説明して想像させる場合、その親の価値観は、言葉によって受け渡されていくことを意味する。たとえば、本当はゴリラは怖く見えても「こわくない、こわくない。かわいいでしょ。」という言葉をかければ、そういう見方もできることに幼児は気づいていく。「大きなゴリラは、ひとりぼっちだね。何考えてるのかなあ。」と言えば、同情を寄せる対象として動物園の動物を見ることも可能なのだと知っていく。

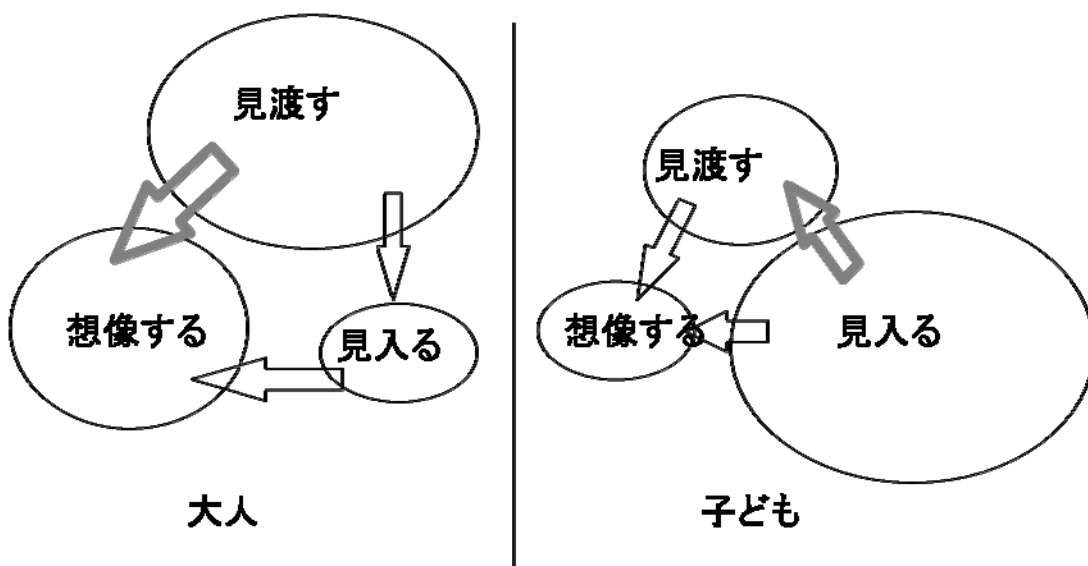
だが同時に、子どもは事実をありのままに「見たままに」報告できる。だから、大人は、自分の中のイメージとしての「ゴリラ」がどういうものであるか、逆に子どもの表現と対比させて改めて自覚させられる。いろいろな年齢の子どもとの対話の重要性はここにある。子どもは親の知識や体験、語り口に表れる価値観を受け取りながら、同時に大人の側も、目の前の事実の解釈について、子どもの率直な感じ方を手がかりにしながら、できあがってしまった自分のイメージや先入観を再検討していく、という関係が展開するだろう。野生動物への理解をより深めるとは、こうした「動物の見方」「事実のとらえ方」などの「観」の変化であり、大人にとっても、見えないことを想像するという「見方」は、子どもの直接的な表現に助けられるのではなかろうか。

だから、子どもが見えないことを想像して理解を拓げていき、親も自分の感じ方を再検討していくには、いったんその現場を離れて、自由にイメージを交換しあうということも重要になる。「野生動物の本当の暮らし」あるいは他の動植物との関係・人間の暮らしとの関係など、「展示だけでは見えないこと」の中にこそ、野生動物の理解のための手がかりが含まれている。親の説明を聞き、親自身が知っていること・体験したことを「確からしい事実」に加えながら、子どもは自分の体験もそれに加えて、想像の世界を少しずつ拓げていける。そして、目の前のゴリラやチンパンジーの仲間が住んでいるであろう遠い現実の世界があるこ

とも、事実として受け入れていけるのである。その際、大人から言葉とともに受け渡される「価値観」の影響により、動物の見方、態度も創られていく。見たこと、見えた事実に依拠しながらも、やはりどういう動物なのか、という動物への「理解」は、イメージの作り替えすなわち「観」の成立のプロセスにおいて進み、その構築自体が野生との共存の感覚を創り出していくものと筆者は考える。

その意味で、いったん展示動物との関わりを離れてゆっくりと語り合いながら過ごせる場の重要性が認められる。逆に、「過ごす」ということには語らいが必ず含まれるものである。互いのイメージを交換し合うこと、それは言語を媒介とした共通の体験の編み直しであり、「過ごす」ことにはその編み直しが含まれる。

以上に述べた、「ながめる」「じっくりと見入る」「見えないことを想像して価値づける」の三つの「見方」それぞれに、筆者は年齢に応じた主体的能動的な視覚が生み出されていると考える。これらの関係を以下に図示する。



円の大きさは、個人の中の「見方」の使われ方を模式的に表したもの。右側の「子ども」は、発達と共に「大人」に近づいていく。子どもは、大人からの助けがないと「想像する」のは難しい。しかし、自分の「印象」を率直に表現していくことにより、周囲の大人からの助けを借りて想像していくことができるようになる。両者の大きな違いは、子どもは入り混みながら眺めようとするが、大人は全体を眺めて子どもの興味を惹きそうなものを探す。子どもでは、見入るから想像するにはあらたな能動的活動 (activity) が必要となる。大人では、見渡すから想像するへの能動的活動が必要となる。

図 5 7 展示に対する能動的な視覚（大人と子どもの比較）模式図

それぞれの見方に「異なる能動性」が発揮される。何かを探して対象を見つけようとする能動性、対象動物そのものに惹かれて想像力を発揮する能動性、全体を眺めつつそれから受ける印象をもとに想像力を発揮する能動性、というように。動物園側・展示者側として重要なのは、「展示を見て語りあう」という体験の中の能動性*6を見いだすことにあり、そこに依拠しつつ展示解説が工夫されることが求められる。

その能動性については、Gill（1993：p.52-54）によると、活動（activity）の役割は、潜在的な知から顕在的な知への高まり（変化）を引きおこすことにあるとされる。この認識の変化は、何かに気づいてある対象に集中させるという activity のプロセスに、あるいはまた、感じたこと（bodily）を概念化させる activity のプロセスに見いだせる。これを筆者の模式図に引きつけてみるなら、前者は、たとえば「見渡す」から「見入る」への、後者は「見入る」から「想像する」へのプロセスであると言える。

それゆえ、具体的にこれらの「能動性」が発揮されているその瞬間を把握する術をもつこと、そしてそれぞれの年齢やもともとの関心事（あるいは既知のことから）と関連させた認識活動の展開を知る術を展示者側が持たなければならないと言える。この三つの「見方のモード」が、その術として役立てられるよう、実際の調査研究の中で確認していくことが求められる。

第 1 1 章

来園者の能動的視覚を生み出す 動物展示法と解説のあり方への提言

はじめに

展示観覧体験における観覧者の能動性確保をなぜ重視するのだろうか。

筆者は、第 1 章で、博物館の展示法改革が、バウハウスやノイラートの革新的方法においてなされ、大きな影響を与えてきたことにもふれ、そこに「新しい視覚体験を観覧者に提供する」という姿勢がみられたと述べた。と同時に、展示をめぐるコミュニケーション論の展開は、「コミュニケーションシステムを作動するのは観覧者自身」という視点が認知科学の成果も影響して導入され、展示を見る側の能動性が重視されてきたことにも触れた。来館者研究の今日的動向においても、展示を見る側の主体的解釈と意味創出過程が重視されていることも紹介した。

動物展示に関して言うならば、展示改革は、擬似的に生息環境を再現して生息地を想像してもらい、あるいは、その種本来の行動が発現されてそれを見ることにより、動物への理解を得ようとするものであった。そこには展示観覧者に「新しい視覚体験」を提供することによって、野生動物それ自身と生息環境について知ってもらいたいという意図がある。ここに、「新しい視覚体験」を受け身とし

て体験するのではなく、観覧者が主体的に解釈してその体験の意味をそれぞれ創り上げていくという視点が導入されるべきだからである。

前章で提示した「能動的な視覚」創出のモデルにそって考えるならば、「三つの見方のモード」のそれぞれにおける能動性とは別に、異なるモードへの移行の能動性が考えられる。筆者は、展示者側としての工夫を「提言」として以下に述べるにあたり、それぞれの「モード」における能動性発揮の問題と、異なるモードへの移行、とりわけ「見入る」から「見えないことの想像」あるいは、「眺める」から「見えないことの想像」への移行を支援する上で求められる働きかけをとりあげている。

この「見えないことの想像」とは何を指すのだろうか。それを追求することの中にこそ動物園の存在理由があると筆者は考える。野生動物の本当の暮らしとはどういうものなのか、人間とどのような関係にあるのか。それを知らせようとして、なぜ、野生動物の展示をするのか。なぜ、野生動物を囲い込んで擬似自然の中で動物を飼い続けるという動物園は、存在し続ける意味があるのか。動物園を存続させ続けている背景とは何か。このように、「見えないことの想像」とは、言い換えれば「事実を手がかりに自分の内側に世界を創ること」および「事実をそこに展開させ続けている背景を思うこと」である。それらの想像とは、人々がそれぞれの関心の深さや価値観によって異なり、影響しあうものであろう。ここに人々の対話、とりわけ家族連れであれば親と子、あるいは兄弟同士、そしてときには展示解説者とのやりとりを重視する根拠がある。そこに足を運び、目の前の展示物や展示動物あるいは動物の見せる行動という事実を「見る」という体験を通して、観覧者が内側に創り上げる「意味」は、「見えないことを知ろうとする、理解しようとする」姿勢に大きく影響されるにちがいない。このような理由から、観覧者の「主体性・能動性」が発揮されるような働きかけというものを筆者は重視するのである。

1 節 動物への共感が触発される展示

年少の幼児によく見られた「動物への呼びかけ」は、この年齢層の幼児の能動

的な展示利用の表れである。

その能動性は、動物の行動や姿から触発されるものではあるが、まるで自分がその動物のすぐそばにいるかのような感覚をもつこと自体に、明らかな幼児なりの働きかけの姿勢を見てとれる。しかも、幼児の動物への共感的な態度や表現のしかたに触れて、いっしょにいる親たちも、動物に働きかけるという場面も見られた。

また、やや年長になってくるとみられる、動物の行動や形態についての気づいたことの指摘、疑問の提示、あるいは同行する親に自分の興味を示して同意を得るようなやりとりも、きっかけとしては「何かをしている動物の姿」に接するからである。

急に走り出し、ドラミングをしたゴリラに驚いて後ずさりし、「今のは何？」と訊ねること、うしろ足で器用に枝をつかんで食べているところを見て、「足でつかんでる！」と思わず叫んでしまうこと、チンパンジーが真剣な表情で UFO キャッチャーの穴に枝を差し込んで餌をうまく落とせたとき、「やったー」と自分のことのように喜ぶこと、これらは動物の特徴あるしぐさや表情そのものに触発された行動である。無意識のうちに既知のことや自分の持っていたイメージと比較し、目の前の動物の様子がそれと大きく異なった場合、あるいは期待する結果がうまくおきることを願う場合に自発的に行われる活動であり、そこに能動性をみることができる。生きている動物の「行動」を間近に見ることができる展示には、このような能動性を発揮させる条件があると考えられる。

しかし、強化ガラスの導入により、動物と来園者の物理的距離を縮めることができたとしても、幼児にはその「接近」は効果的ではない場合があることも示された。すなわち、物理的接近を可能にしたガラスが、逆に遮蔽感を与えるという側面も認めなければならない。

2 節 動物以外に利用できる「展示物」の配置とその意味

展示動物以外のさまざまな展示物利用の特徴からみた「能動性」確保についてふれる。少し具体例にさかのぼって考えてみよう。ゴリラの生態展示には、第6章にあげた展示物が通路を挟んだ展示コーナーにあり、来園者は自由にそれらを

見て楽しむことができる。チンパンジーの新展示では、旧展示時代の解説パネルや個体表と共通した展示物に加えて、レリーフや餌展示、骨格標本をおいた。

ゴリラの生態展示・新チンパンジー展示で共通して利用度が高かったのが、類人猿同士の「大きさ比べ」レリーフであった（第6章、2節）。手の大きさや足形の所では、必ずといってよいほど子どもたちが自分の手足をあわせて確かめる。足形を目でとらえ、そこに自分の手足を重ねるという行動は、大人は自発的にほとんどしない行動であった。子どもの中には、靴下を脱いで自分の裸の足を、床に置かれたゴリラやオランウータンの足形に重ねる子どももいた。つまりこのレリーフは、思わず手や足を重ねようとする子どもの共通した反応を引き出し、逆に、この「重ねようとする」ことに、展示物に関わろうとする能動性を見いだせる。大人は、そのような子どもの反応を喜び、その姿を写真に撮ったり子どもにうながされていっしょに手を重ねてみる。

実物大であるという特徴を含んだこの視覚刺激が、どの子どもにも一定の共通反応を引き出すというこの事実と、それに引き続いておこる周囲の大人の反応は、展示者側からはたいへんに重要な意味を持つと考えられる。情報伝達という観点からすれば、たとえば指の長さ比べができ、人間の手足と似ているようで似ていない、という「事実」が把握され、類人猿同士の比較や人間の手足との比較に発展することがよしとされる。手足の大きさを比べて類人猿の特徴を知るという「知的効果」がそこに見られるという受けとめ方がなりたつであろう。その手足をどうやって何に使うのかを想像させる、イメージの拡がりにも寄与するだろう。

しかし同時に、こうした共通の「手を手形に重ねる」「足を足形にのせてみる」という行動を誘発した環境整備のもとで、その親子にとって生じた社会的事実の、その親子にとっての意味も重視されるべきだと考える。「〇〇ちゃんと同じくらいの手だね」「親指、下の方だね」「以外に足って手みたいだね」「足の指が手みたい」という発話が親子の間でなされたときに、それらの社会的やりとりが生み出す「関係」にも価値を置きたいと考える。1章で提起したように、「交わりコミュニケーション」創出を重視する観点からは、思わずレリーフのゴリラの手に自分の手を合わせた子どもの姿に大人も好奇心をそそられて、「いっしょに比べっこを家族でしてみた」体験が大きな意味を持つことになる。「比べる行動を誘発したレリーフ」の、その家族にとっての役割を考える視点、それが大事だと

いうことになる。

また、ゴリラの生態展示の展示コーナーにおける「ゴリラの芸術作品」の大人の利用度は子どもの利用度より相対的に高かった。ゴリラの歯形や遊んだ形跡がそこに残っているというバケツや、手垢のついた木ぎれの展示に足が止まっていた。大人は、その品々を見れば、それを持ってどのようにゴリラが遊んだのかを想像することができ、ゴリラの世界に近づくことができたのだらうと思われる。大人が興味を持てば、子どもに見るよう誘うことはよくあることだ。見えないことを説明してあげられる力が、大人にはある。実は、この「芸術作品」展示は、ゴリラのことを少しでもわかって欲しいと、ボランティアの人々が手作りした展示である。お金もかけず、それぞれがただつるしてあるだけのもので、文字情報といえば、「ゴリラの芸術作品」と「もとはなんだったか（バケツ・段ボール）」だけである。こうした、イメージーションを誘い、個人それぞれの解釈にゆだねられているような展示に、大人は惹かれることがわかる。

ここから得られるヒントは、第一に、「子どもを連れて大人が、子どもに語ってあげられる手がかりがある、あるいは自分のよく知っていることに関連づけられる展示物」を用意することである。第二に、「子どもも思わずそれと関わりたくなるような、あるいは誰かに説明して欲しいと思うような展示物」を用意することである。

さらに筆者は、実際に動物が使用している遊び道具やベッド（巣のこと）、食べ散らかした枝などの実物をいじることのできる、もうひとつの展示あるいはコーナーがあるとよいと考える。これらの展示物を通じて、幼児を含む子どもたちが、自分の体と比べたり、自らの体験を引き出すことにより、自分とは違うが似ているところもある、ということが理解されるにちがいない。大人にとっては、動物も遊ぶということを知り動物への理解がすすみ、また、自分の子どもが興味深く過ごす場面を見ることにより、子どもの遊びを誘発する「動物の存在」を改めて自覚できるのではないだろうか。

3節 「過ごしやすさ」の構成要素

「過ごしやすさ」は、滞在時間に大きく関連し、滞在時間は展示観覧時間に反映する。一般的には、来園者の過ごしやすさへの配慮は、来園者が快適に感じられるかどうかという観点から考えられがちだが、実は、展示意図の伝達にも、あるいは来園者相互の交わりコミュニケーションの質にも大きく影響することが示唆された。たとえば、ゴリラのオープン展示での観察から、「柵の手すり」が親子の語り合いをしやすくする役割を果たしていること、チンパンジー新展示での「展示館」における空調設備や座れる場所があることも、そこでの親子の過ごしやすさを創り出す要素となっており、じっくりと展示物を見たり互いのやりとりの頻度が高まっていることが示された。

これらの過ごしやすさについて展示者側はよく調べ、展示それ自体の改革と同時に、意図伝達にも、交わりの促進にも役立つ「過ごしやすさ」の構成要素を抽出していくべきであろう。

本研究から示唆された「過ごしやすさ」の構成要素としては、少なくとも以下の点をあげることができる。

第一に、観覧者側のスペースの構造である。スペースの広さは、「過ごしやすさ」を生み出す条件のひとつと考えられる。スペースの内部構造としては、休憩をとることができる場所を確保し、その場所からいっしょに来た他のメンバーの所在が見えるような工夫をする。

第二に、混雑の緩和を兼ねた展示ブース（チンパンジー新展示でいえば、展示館がそれにあたる）の設置である。このブースで提供される内容は、情報伝達という目的からだけでなく、過ごしやすさを生み出す目的からも考えられるべきである。なぜなら、子どもを連れた家族の場合、子どもが楽しむものが豊富であるなら、それは楽しい滞在であり、すなわち「過ごしやすさ」を生み出すことだからである。来園者の多い日にのみ開放するようなブースも用意し、そこで休憩もとれるような工夫をし、混雑の緩和に寄与できるようにするとよい。

第三に、一般的には危険防止の人止め柵として機能している柵の手すりが、高さによっては、ちょうど親子が身を預けながら会話できる場としても機能しているように、寄りかけられる手すりのような構造物があることが望ましい。幼児は手すりにつかまりながら、親の方はしゃがんだりせずに体重を預けながら、顔を近づけあえる。そして互いの顔や声の感じが聞き取れる。つかまれる、身を預けら

れる、これらはそこに一定の時間、たたずむ上で、かなり重要な役割を果たす物理的構造物だと筆者は考える。

第四に、当然であるが、暑い季節は風が通るような日かげの用意、寒い季節は床暖房など、ほっとできる空間であることが過ごしやすさに含まれる。

4 節 展示者側から示されるべき情報の吟味

4-1 「なぜその展示法を採用しているのか」についての情報の必要性

ゴリラの生態展示してもチンパンジーの新展示にしても、先述したように、最も不足している情報が、「なぜこの動物たちにこの展示方法を採用しているのか」「動物の生活の質を高めるために具体的にどのような工夫をしているのか」についてのものであると筆者は考える。

その動物展示に際し、なぜその方法をとっているのか、という情報は、展示目的を知ることにも関連し、来園者の能動的な展示観覧に重要な役割を果たすと考えられる。展示によって何かを伝えようとする意志を持った「人間」の存在を知ることが、観覧者の「動物観」や「価値観」に直接影響する。最近の、動物園を特集した著作の中に、こうした、「展示法の根拠」や展示意図についての解説、その工夫は具体的にどのようにしているかなどのテーマが見られるようになったが（川端 1998 など）、このような傾向も、来園者の側や社会が、「動物園をどういう存在として受け入れるべきか」という問題意識の表れだと考えられる。

また、「当該展示法を採用した根拠」を示すことは、動物園の姿勢を明確にすることであり、さまざまな来園者との対話の具体的な素材として有効であるとも考えられる。動物園が全体としてどのような方向を目指しているのか、そのメッセージを題材として、いかようにも来園者は自らの「動物観」や「野生動物への感情」、あるいは「課題意識」を引き出せる可能性があるのではなかろうか。

4-2 新展示法における展示意図の盲点、「なぜその動物に新展示法が採用され、他の動物には採用されないのか」の提示

展示法の根拠を示し、動物園の姿勢を示すのであるならば、そこにはもうひとつの「隠された展示意図」があることにも触れておきたい。

たとえば、生息環境を擬似的に模倣し、まるでその現地にいるかのような錯覚をおきさせるという意図は、そういう展示手法が適用されたその動物自体の「特別な価値」を示すというもうひとつの「意図」の存在を意味してはいないだろうか。

つまり、ゴリラは「貴重な種」であるから、膨大な費用をかけて特別仕立ての飼育環境を用意したのだと受けとめられる可能性はないだろうか。もし、他の種が相変わらずのコンクリートと檻の展示であったら、ゴリラのその「特別さ」は、暗黙のうちに、種によって動物の大事さの程度が異なることを示しているのではないだろうか。動物園全体が展示手法をどの動物に対しても変化させ、どの種類に対しても区別なく飼育環境を整え、より野生に近い行動が展開されるよう心を砕こうとしているなら、自然界に対する人間の位置・責任というものを来園者に深く考えてもらえるであろう。

しかしながら、現実には、動物展示の大がかりな建築は、いわゆる「目玉」となるような話題性のある動物に限られてきた。具体的には、ジャイアントパンダであり、ゴリラであり、チンパンジーである。それに対してたとえばニホンザル展示法は、全体としては旧来の方法が継続している（正田 2001）。

筆者の行った来園者へのインタビューでは、たしかに、最新技術を駆使し、デザイン的にも優れたゴリラ生態展示や新チンパンジー展示について高い評価が得られたが、その「新しさ」自体を動物園環境全体のなかで評価しようとする傾向もみられた。つまり、なぜゴリラ、チンパンジーの新しい展示で、他の動物はそのままなのかと。

「他の種より大事にすべき種だからなのか？」 それとも、「類人猿であってヒトに近い動物だからなのか？」との問いかけを動物園側は覚悟すべきである。

展示意図が、「生息地情報を擬似的自然において見せたい」「より豊かな飼育環境を用意して動物の行動を引き出したい」ということならば、それはなぜ「その動物」を対象とし、なぜ「他の動物」を対象としないのかを動物園側は自問すべきである。もし優先順位があるとするなら、それはなぜなのかを示さなければならぬ。まさに、その「種」の選定や展示改革の規模にこそ、動物園の「飼育

動物に対する態度」が表れる。そして、展示改革を含めて、将来にわたり何を目指したところであるのか、「現在進行形」で示す必要がある。このことは、実に重要である。来園者は、そうした動物園全体の姿勢や雰囲気の中で、展示を見てある。それぞれの展示が個別に独立したものとしてはとらえないからである。

展示の意図の伝わり具合の調査、あるいは効果的な情報提供のしかたの研究なども、この「動物園全体としての姿勢」を来園者がどう受けとめているのか、ということと関連させてとらえていくべきである。

5 節 野生動物理解へのステップ：「展示解説者」の役割

筆者は、子どもに対する動物展示の際の工夫として、以前、①「飼育すること」の展示 ②「個性」の展示をあげ、解説的要素としては、①人間の能力との対比 ②人間が負っている生命への責任などをあげた（並木 1998）。その工夫の目的は、動物を自分の存在との連続において感じ取れることである。

動物園の動物を見て子どもが「野生動物への理解」を得るためには、人間の能力と対比したときの秀でた能力を知り、一頭一頭がそれぞれ個性を持っていることを知り、そして、人間の管理を離れたところで自立した生活が営まれていることを知るという、多くのステップを経ることが必要となる。だが、展示前での親子だけでのやりとりでは、とくに「自立した生活」への想像については難しいことが示された。だからこそ、動物のことをよく知り、野生生活について想像してもらえらるヒントを出せるような人々の介在が重要になる。その場では見えないことをいろいろな媒介物を通じて知らせる働きかけであり、「実際にはこういう動物である」と、エピソードを交えて豊かに語れる解説員の存在によって、初めて想像が可能になる。

第9章で示したように、ボランティア解説員のように日頃来園者と密接に関わりを持ち、積極的に展示解説をしようという立場にある人々は、来園者の考えていることや要望と共通する見方や感じ方を持った上で、さらに、展示動物にとってのよりよい環境整備への意見を持っている。このような立場にある人々からの、来園者理解に関する情報提供が、展示法改革の方向性や展示解説のあり方に活か

されることは非常に有益で、必要だと筆者は考える。しかも、解説員自身の「要望」のひとつが、来園者とより密接に関わりたいということを考えて、常にこうした解説者の人々と展示者側とが体験を交換し合える組織的なとりくみが、来園者の「能動性」を高めていく上で有効だと考える。博物館は「人」と「もの」を結びつけるという場だとする原点も、解説者側に、来園者をより理解していこうとする動機が常に生じることにあるのではなかろうか。

なお、筆者の考えでは、「解説員による展示解説」に加えて、展示解釈を自由に展開できることも重要な要素と言える。この自由な展示解釈に、たとえば中高生などの世代が積極的に加わることが望ましい。それは、第8章の実験結果にみたように、高校生群が他の年生群よりもゴリラの行動解釈を多義的多面的に行うことができるという根拠による。前川（2000）の試みでは、高校生が動物園での観察記録の他に、感じたことを自由に短歌形式で述べさせ、日常会話の中にさりげなく動物や保護の話が入ってくることを期待している。その文字表現は、高校生のみずみずしい感性を示すもので、本研究の「高校生の表現の相対的豊かさ」という結果を支持していると筆者はとらえる。

もし、こうした豊かな表現能力を持つ年齢層が、動物展示から受けとめることや、動物の行動に対する解釈を自由に表現することができて、それが展示解説の内容にも生かされていくなれば、同世代の来園者にとっての影響は大きいにちがいない。その具体的なとりくみは、次節に述べるような教育プログラムのひとつに組み込まれて実践されていくとよいだろう。

6節 教育プログラムと展示デザイン

欧米の動物園は、その地域における生涯教育の一環としての役割が増大しており、直接の来園者だけではなく、地域の非来園者に対しても数多くのプログラムを擁している。それらは、大きく分けて①明確な対象に対する教育：地域の学校の子どもに対するもの、一般へのトーク、地域の生涯教育プログラムへの参入、②組織内での教育と大学などでの特殊教育・およびプロの育成などが積極的になされている。

ここでの教育プログラムとは、展示解説を含み、来園者のさまざまな層あるい

は地域の非来園者に対して、目的別にとりくみまれるプログラムをさしている。欧米では、現在、野生生物保全の教育という大きな枠組みなかに動物園における教育を位置づけるという明確な指針がある (Kelly 1997) が、日本でも少しずつその立場を明確にしたプログラム作りが進められている。こうした教育プログラムの利点は、「参加しよう」とする意志が始めから明確に参加者側にあり、そこに依拠したとりくみができるという点であろう。

いささか単純だが、「展示動物から何かを得てもらう→動物を含む展示全体から何かを得てもらう→展示解説の機能を整えてその情報を得てもらう→野生生物の保全に寄与する実践性のある学習をしてもらう」というような流れを、動物園における教育の変化にみることができ、その流れは日本においても共通している。具体的には、80年代前半までの日本の動物園/水族館で行われる教育的な活動報告の大半は、展示動物についての日常的な解説内容そのものに重きをおくよりも、たとえば特定の参加者を対象としたいわば特殊な教室やイベントとしての活動の紹介であったが、80年代後半から、ラベル(看板類)の効用や一般来園者の展示利用に関する調査や、環境教育実践の場として動物園を見直す立場からの実践報告が増えている(日本動物園水族館教育研究会発表内容から。これらの演題については、高橋(1999)により紹介されている)。

こうした、野生生物保全につなげるという、教育プログラムの目的が鮮明であればあるほど、一般来園者とくに子どもを含む家族連れにとっては、単に展示を見て帰ること以上の鮮明な記憶となるにちがいない。その鮮明さには、一方ではその時代の要請として地域の一般の人々に伝えるべきだと「動物園側」「展示者側」が考えている度合いと、他方では参加者それぞれの参加動機とが影響する。戸外レクリエーションを目的として来園する多くの家族連れが、動物園にそうした明確な教育目的のプログラム利用を希望するのかどうか、あるいは、利用してもらえるような働きかけはどのようにすべきか、その基本的な姿勢には、動物園側が来園者をどういう存在として位置づけているのかという来園者観が大きく影響する。すなわち、展示を見たりプログラムに参加する来園者を能動的な意味構築の主体としてとらえるのか、娯楽的サービスの受け手としてとらえるのか、という見方である。筆者は、前者の来園者観が、「娯楽」という概念自体の問い直しの作業の過程、すなわち「楽しさと学びの関係を学習論として位置づける」過

程で、動物園側すなわち展示者側に構築されていくべきであるという立場である。その構築には、さまざまな来園者層との密接なかかわりあい展示者側が「体験する」ことが主要な要件になるであろう。その体験は、展示解説を含む教育プログラムの実践において蓄積されていくものでもある。

また同時に、来園者自身の意識の変容という点にも注目すべきである。生きている動物を展示の主要な要素として、その時代に要求される「野生生物保全」の考え方を広げようとする事と、生きている動物に出会う体験の場の提供しようとする事と関係は、常に具体的にそこに存在する来園者自身の利用意志と関連する。しかし、たとえば、解説者の語り口や対話を通して野生動物の暮らしについて知るといふ新しい経験は、人々にとってのそれまでの動物園来園の意味を作り替えるかもしれないのである。動物に出会うという体験を、アルバムの中の思い出だけにしない、次の何らかの実践的な行動につなげていけるような可能性を、来園者自身が備えているということを銘記すべきであろう。実際に野外生物の観察会などのプログラムでは、参加者は生物の分類や標本づくりという作業のみならず、解説者の人柄に触れること自体に楽しみを感じている。それを感じたがゆえに、身近な野生生物の生息地の「場の保護」の必要を自覚し、自分も楽しみを他の人と分かち合いたいと思うのである(たとえば、レニエら, 1994)。

つまり、語ってくれる解説員自身の「動物への共感」を感じ取ってさらに自らの共感が広がると言うことである。解説員との対話を通じて、直接には見えない野生への共感をひろげていけるような働きかけが「野生動物への理解」ということになる。これが、展示法の改革で目指した「新しい視覚の創出」の上で大きな力になるだろう。

動物園における教育プログラムは、来園者が動物を能動的に見るといふ経験をして、見たことの新たな意味づけをしていくことに対し、大きな影響を持つと筆者は考える。もちろんそれは展示を中心としつつも、野生動物についてのさまざまな「語り」といふ方法が有効であることを筆者は主張したい。どういう教育プログラムを誰に対してもつのかは、このように、動物園側のもつ来園者像と動物園自身の社会的義務感とを基盤としながら、やはり動物園側からの積極的な対話や働きかけがひとつの鍵になるちがいない。

7節 サイン類を含む展示デザインの工夫

展示意図の伝達を目標としながら展示コンセプトをデザインし、「対話」を重視した教育プログラムによる積極的な展示利用が図られれば、動物園は人々に、新しい「動物園体験」をもたらすことになるだろう。博物館の中心的機能があくまで「展示」であり、それを教育的に使いこなせる「来園者」が育っていける学習環境を整え、そこにおける「具体的な学習」の諸要素を「学習」として見極めていけるだけの力が動物園側に備わらなければならない。

動物園を含め、博物館を学習環境として来館（園）者の側からとらえる理論と方法を構築していく必要があるだろう。しかしそれは、何か「学習理論」を他から借りてくるのではなく、やはり、博物館としての目的意識を常に問い直しながら、実際におきていることがらをていねいに見ていくという、地道で「その博物館」独自の特徴が浮き彫りになるような作業の積み重ねなのだろうと思われる。その積み重ねにも、教育プログラムの企画と実践は有効である。なぜなら、プログラムを通じて博物館/動物園は直接に人々と対話するチャンスが増えるからである。しかも、対話が増えれば、展示デザインの改良への示唆が次々とえられる。

博物館展示の改良と教育プログラムは、こうして相乗的な関係にあり、けっして「展示が使えないのでプログラムやワークショップで楽しんでもらう」、「展示にいいものを使っているからそれでプログラムが無くてよい」というものではない。

展示デザインの改良というと、大規模な作り替えというイメージを生じやすいが、実際にはサインの組み替えや文字表記のしかた、位置などでわかりやすくメッセージが伝わることも確かめられてきている（川嶋-ベルトラン, 2000）。そもそも展示のメッセージ伝達が、展示物のどのような空間配置においてより成功するかを研究することはおよそ展示法の研究に携わるものなら主な関心事のひとつである。ベストな状況に向かって、よりベターな配置を計画・実施するという実践は非常に重要で、その意味で展示改革は「プロセス」なのである。そして、その手直しや小規模の変化が「来館者に何をもたらすのか」を観察し、たとえば本研究のような来館者相互のやりとりの質的評価を加え、検証していくことが求められるだろう。

また、展示を見る人々への「問いかけ」など教育的要素を備えた看板がつくられることもある。Seger (1993) が紹介するように、看板の内容に「感情に訴える」ような内容を取り入れると、教育的メッセージを届けやすいということも、調べられている*7。

さらにAndersen (1992) *8は、サイン類と展示利用の関係について次のように述べている。「展示の中に来園者が自分で発見できるような問いかけのある機能をサインに含める・疑問に対する答えがサインに入っていることが必要だ」と。同時に、展示法全体の中でのサイン類が果たす役割について、次ような提案をしている。すなわち、「動物展示は、①動物の獣医学的観点からの衛生的管理 ②動物の本来の行動が展開できる工夫があること ③自然主義的な工夫が施されること ④視覚的に『より自然な感じ』に見えることがよしとされてはいるが、人工物の配置を排するというのが真髓ではなく、あくまで動物の行動誘発が優先されることが望ましい」とし、そのような動物展示を来園者が自ら使いこなせる「解説機能」が重要だと指摘している。この指摘には、イマージョン展示への注意深くまとを得た批判、すなわち『来園者の錯覚』にまさる『動物行動の発現』を重視すべきという立場が読みとれる。そこにこそ、サイン類を含む解説機能の積極的役割を求めている。筆者も基本的にこの立場である。展示とサイン、両者の相乗の関係が生まれるようなスタイルを研究する余地は、まだまだあるだろう。

実際、展示とサイン類を使いこなす教育プログラムによって、野生動物の具体的状況を知らせて保全教育(多様性保護への注意を喚起すること)を行おうという強い目的意識に支えられた動物園も、数多く生まれている (Rhoades, 1989 ; Hansen, 1989 ; Piper, 1992)。来園者が動物園を「使いこなす」ために各種プログラムを整備していこうとする姿勢がここに見られる。

展示をこれから計画していく場合と、大がかりな改革は当面望めないが改良はできる場合とで、具体的なプログラムの内容と方法は異なるが、少なくとも「今ここにある展示」を最大に活かしながらすすめることのできるプログラムについて、実践と手応え(評価)を数多く行ってみることが、その展示の価値を引き出し、あらたなデザイン計画の糧となるだろう。

8 節 展示解説と動物行動解説の役割の違いへの着目

映像による動物の行動の解釈のしかたの発達に関する実験で得られた、表現のしかたの年齢差は、異なる年齢の組み合わせである家族連れの交わりを、より促進する可能性を示した。とくに、幼児の「自分の気持ちと動物の気持ちの未分化」の傾向、青年期（高校生）の解釈の多義性や表現の豊かさ、逆に大人の表現の相対的貧相さ、日頃動物に接することの多い展示者側（飼育エキスパート）は動物が見られることへの拒否感が他群より強いことなどの結果は、だれが展示解説と動物の行動解説を行うべきかを考える上で参考になる。

さらに、日常的に展示解説に携わる人々（ここではボランティア解説員）が、来園者の展示の見方や展示に対する意見と共通した意見を持った上で、自分の考えを持っていることが明らかとなり、こうした人々に蓄積された経験をよく知って、来園者への働きかけの進め方を模索することが有意義であると考えられる。とくに、自分が何を来園者に伝えたいのか・わかって欲しいのかを、来園者とのやりとりの経験の中で明らかになっていくという点は、あらかじめ「伝達すべき知」が解説者の中に存在するのではなく、関わる過程でメッセージが徐々に鮮明になっていくということの意味しており、この点は実に重要だと考える。

飼育係のようなエキスパートは、日常的に来園者と関わりを持つ機会が少なく、動物の行動解説などは、目的つまり、結論をはじめに述べてしまう可能性が少なくない。さまざまな関心と展示の見方をする多様な来園者の求めを感じながら、展示の多様な理解を支援するには、やはり来園者と「かかわる・やりとりをする」経験と、自らが来園者に近い立場で「ともに展示を理解していくプロセスを経ること」が何より重要であろう。

筆者は、三つの「見方のモード」を来園者の展示観覧のしかたを理解するひとつの手がかりとして提示したが、最も能動性を必要とする「見えないことの想像」には、あらかじめ「伝達したい内容」を鮮明に提示しすぎると、観覧者自身の想像しようとする気持ちを、かえって失わせるという事態を招く場合があると予想する。来園者に対する展示解説では、直接、行動解説をすることを主たる目的におくのではなく、一人ひとりの経験や背景にそって、それぞれが意味ある展示観覧体験を創り上げるための補助的な介在が求められる。それが、観覧者の能動的な視覚体験を支援する方法のひとつと考える。

経験や背景とは、もちろん観覧者の年齢差による印象の持ち方や表現のしかたの異なり具合も含まれる。したが、解説者に求められる素養は、観覧者のそれぞれの関心事に触れながら、展示意図と関連する事実や手がかりを示せることと、観覧者が気づいたことや印象に対してそれを表現できるようながすこと、さらには、幼児や子どもが大勢来園する動物園では、当然ながら幼児や子どもの発達についても基本的に知っていることが求められる。

少し具体的に述べよう。たとえば、解説者は観覧者が見ている事物や事実が、「どうしてそこにあり、なぜその行動が展開しているか」に関する情報を提供すべきである。たとえば、人工アリ塚に枝をさしてジュースを舐めとる行動や、10メートルもあるような塔にするすると登る行動が実際に見えたとき、「その人工物や塔、ロープ」を計画的にその展示に置いた「わけ」を示すのである。それらの「見えているもの」が、チンパンジーの本来の行動を誘発するためにおかれ、行動誘発の目的は何かを明確に示すのである。そうした行動誘発の目的は、直接的には、飼育展示されているチンパンジー個体の「福祉」であるが、同時に、チンパンジーの要求が「それ」によって満たされていることにより、野生生活で実際に必要な環境要素とは何なのかを想像してもらい手がかりになるのである。さらに、それらの必要な要素が実際には奪われつつあるという現実が知らされることにより（たとえば、熱帯雨林の大規模伐採など）、見えない真実にたどり着くことも可能であろう。したが、この場合の展示解説に必要なこととは、「その動物」の要求する環境要素の代替物を動物たちのために用意し、日々よりよい代替物を研究し、試していくという展示者側の具体的な試みを、提供すべき情報に入れ込むことである。その展示者側の試みがあって初めてそこに「見えている行動」が存在するのである。こうして、展示解説者の提供する情報あるいは展示を読み解くための手がかりは、観覧者が主体的に、見ている展示の中に「それ」がある意義を理解するのに役立つだろう。もし、幼児に対してなら、実際にチンパンジーが使っているロープや枝と同じものを使ってもらい、たくさんの遊び道具に囲まれて過ごす楽しさを知ってもらい、これが、筆者が考える「能動的視覚」を生み出すための具体的支援のひとつの方法である。もちろん、さまざまな年齢層とその組み合わせである「家族連れ来園者」の観覧体験は、その子どもの日常生活における関心事や経験をよく知っている大人（主には親）の介在があってより

豊かに展開する。

こうしてみると、「解説者」とは、「展示」あるいは「展示動物」を解説するというよりも、展示をしつらえた人々の存在とその意志を観覧者に感じてもらうためのさまざまな手だてをとる、という役割が大きいのではないかと考えられる。それを追及するなら、おそらく、動物園という公共の空間が、わざわざ都会に作られているという存在理由にも言及することになるだろう。このような内容の展示解説を積極的に行うということは、残念ながら日本の動物園ではまだ多くない。そこに動物園があることを前提とした動物行動解説は日々行われているが。しかし、本章の「はじめに」で触れたように、そもそも、動物園の存在理由にまでさかのぼるような対話が意識的になされることによって、「見えないことの想像」は深まるのである。野生動物への理解を来園者に求めるという動物園の展示法改革が、実際に、人々の展示観覧体験の過程で意味をなすのは、こうした、より深い「見えないこと」すなわち「その見える事実を生み出している背景」に少しでも触れようとする展示者側の意志が鍵を握るであろう。

そこに「動物展示」という物理的環境が存在するという事は、動物にとってのよりよい環境を工夫し、そのセッティングの舞台を整えるという展示者側の日常の行為があり、それを「見に来る」行為があるからである。展示者側は、展示との中で暮らす動物を通じて、来園者に知って欲しいことがらをそこに表現する。観覧者側は、互いのコミュニケーションを通じてその展示にみられる事実や関われることがらをそれぞれのやりかたで解釈し、意味づけていく。その解釈や意味づけは、展示者側の「工夫」の根拠を知ることによって、格段に深まる可能性があると考えられる。この深まり具合に支えられて、新たな展示意図もそこに生まれるのである。

すなわち、ある動物を展示している展示者側が「行動解説」をすることは、観覧者の動物への理解が深まることを期待するが、展示を見る側にとっては、その展示を成り立たせている背景や諸条件、動物の飼育や展示に携わる人々の存在や意志を感じ取ることのできる「展示解説」の助けを借りて、人々が主体的に見えないことを想像して真実に近づくこと、それが重要なのだと考える。しかも、そのような見る側の人々の成長や意識の変容に支えられて、展示者側の意図も新たに創られていくのではないだろうか。

そもそも、序論に述べたように、展示の持つ二重性とは、展示者側の目的意識に支えられてそこにあり続ける物理的存在としての展示が、観覧者にとっては、その意志を感じながら自由に使いこなして自己革新をしていくための「心理的な道具」でもあるということであった。そして、「展示の意図」自体も、来園者の観覧体験すなわち道具の使われかたを展示者側が理解することで、変容していくものと考えられる。展示意図の変容、それが実際に動物園の動物展示において、どのようにおきていくのか、そのことを追求すること、それが筆者の次なる課題となるだろう。

終章

結論と課題

1 節 結論

来園者相互の交わりとしてのコミュニケーションを含んだ来園者研究では、展示を見ること・展示動物から感じ取れることが、来園者相互の向き合う関係のもとにどのように展開しているのか、その多様な展開の様相をつかむ方法が確立されることが必要となる。第1章で筆者が創出し、本論の調査で用いた「新しいコミュニケーションモデル＝交わりとしてのコミュニケーション」は、家族同士という来園者相互の社会的やりとりを意味したものだが、実はそれらのやりとりは、「展示のどこに注目するのか」「見ようとするのか」といった視覚の創出と、「展示動物から感じ取れること」「展示動物への関心」といった動物との関係を持つようとする指向性、そして年齢による関心の持ち方の違いという、複雑なベクトルの絡み合いであった。

筆者は、これらの交わりとしてのコミュニケーションの諸特徴を、「類人猿の新しい展示方法の評価」基準として用いたのであった。すなわち、展示者側の展示意図が来園者相互の交わりとしての「発話」のなかに表れるのかどうか、同時に、来園者相互の交わりのしかたは、展示法と関連があるのかどうか、という観点からの展示方法の評価のこころみであった。

これまでの展示評価とは、第1章に述べたように、展示者側の「展示意図」の伝わりかたの効率や正確さという評価基準を持つ場合が多かった。人々がまだ知らないことを知らしめるという「知の伝授」の視点が主流だったのである。もちろん、展示意図を明確に持つこと自体は決して悪いことではない。研究成果を表現するという行為自体は必要なことであり、正しく伝えようと工夫を凝らすことはもちろん展示者側に求められることである。しかし、展示評価は、主として博物館側からの展示意図の伝わり具合の検証を中心になされ、そこでの検証とは、あくまで、これこれの展示の物理的特徴を独立変数とおき、来館者の認識を従属変数において、来館者の認識変化をとらえることであった。

この傾向に対する批判は、博物館研究への「構成主義」（社会構成主義を含む）の導入により始まった。それは、博物館における来館者の学習体験を支援する・組み立てる、という立場である。そこでは、博物館側と来館者側との双方向のコミュニケーションが重視されたことに加え、展示を通じて来館者にとっての新しい意味の創出がなされるという視点が新しく加えられた。来館者が自ら展示解釈を行うという主体性を重視した、「情報の受け手」から「意味の創り手」への視点の転換である。展示されている「もの」や「ことがら」が、展示を見る人々の「見るという体験」を通じて、来館者自身にとっての何らかの意味を作り上げる上で役にたつ、という考え方である。

筆者は、自らにとっての意味を作り上げる過程に、さらに、「同じものを見ながら取り交わされる社会的交流」も重要だという視点もそこに加えたのである。

そして、親子連れ来園者へのインタビューと、展示を見ている彼らの発話された「コトバ」に注目したやりとりの観察によって、実際の新しい類人猿展示法とそれまでの展示法とでは「交わりコミュニケーション」の何が異なるのかを見出した。また、動物を見ながら感じたことを話すという言語表現の年齢的発達変化についても、実験を行った。さらに、実際に来園者と日常的に接しながら動物解説活動を行っている解説員へのインタビューも行い、来園者の主体的な展示利用を支援する上で必要とされることを考察した。

以下に、各調査結果を序論に述べたリサーチクエスションと対応させてまとめる。

調査1-1：展示意図伝達の側面について

どちらの類人猿の新しい展示法も、展示意図の伝わりやすさの比較では、それまでの展示法と著しい差異があったとは言えなかったが、より微視的に見ていくと、子どもの年齢によっては、動物との接近のさせかたの工夫・豊富な触れることのできる展示物利用により、効果の現れた側面もあった。

展示意図のひとつである「野生生息地の想像」は、インタビューでは新しい展示法がすぐれているとは言えず、むしろ、子どもはチンパンジー旧展示で得られた結果のように、運動場に散らばる枝や葉をその動物に必要なものと理解する傾向が大人よりみられた。逆に大人は、「ジャングル」というような自分の中のイメージを生息地として想像している傾向がみられた。しかし、チンパンジー新展示における実際の発話の中では、生息地に関する話題がやや多くなった。

「社会行動」「知的活動」を知らせるといふ展示意図についても、実際の動物の行動頻度とそれを話題にすることとの間には強い関連はみられなかった。効果が認められたのは、チンパンジー新展示における豊富な展示物や類人猿実物大レリーフ、解説物利用による知的活動への興味の増大、ゴリラ生態展示での実物大レリーフ利用による形態への興味の増大であった。（第6章2、3節）

調査1-2：交わりコミュニケーションの側面について

親子の言語を中心とした社会的やりとりは、展示前で過ごせる時間の長さに関連があり、長じれば、動物への呼びかけや自分の印象を交換し合うという発話が見られた。ただし、数分すごせる工夫がないと、動物を発見しただけでやりとりは少なくなってしまう。語り合うためには、やりとりを誘い、相手の説明を求めるといった手がかりとなるような展示物の配置や、過ごしやすい環境の有無が影響する。（第7章1、2、3節）

交わりの質については、発話を6つのカテゴリ出現の有無で分析し、その出現頻度比較により、新しい展示法の「来園者相互の交わりコミュニケーション」への役割を探った。ゴリラの新しい展示法のもとでは、従来の展示に比べ、ゴリラの行動についての具体的な事実指摘が親子の間で多くなされたが、動物への呼

びかけや印象を語り合うことは少なくなった。またとくに、運動場内を移動していくあるいはこちらへの接近という「ロコモーション」行動の際に、動物に呼びかける発話が増え、こうした動きが動物と関わりたい気持ちを引き出す役割をしていると考えられる（第6章2節および第7章5節）。

しかし、チンパンジーの場合は、ゴリラほどには「見える行動」に対する発話は増加せず、わずかに「運動や移動」の際にその見たことの実指摘が増加したのみであった。チンパンジー新展示では、「行動を見て」そのことに対して発話するよりも、展示館内の展示物と関わるときの発話が相対的に増加したため、このような結果になったと考えられる。とくに「実物大レリーフや、道具説明の看板などの展示物を見るよう、うながしたりあいづちをうつ」という社会的やりとりが多くなされた（第6章2節および第7章5節）。

「子ども」といっても、展示動物といっしょに自分がいるような感覚をもてる幼児と、自分が展示を「眺めている」ことを自覚して、対象として動物を見始めることができるような就学後の子どもの違いがある。小学生になると、動物に対する自分の印象を語る場合に、動物を哀れむような表現が、展示法によっては相対的に多く使われる。とくにそれは、一望にして全体を眺めることができるような中に、1～2頭の数の少ない動物が展示されているときに表れる。ゴリラの生態展示では、従来のオープン展示と比べ、動物への同情的な発話が減少した。自然を取り入れた展示法が、伝達意図である「生息地想像」には直接寄与したわけではないが、動物への皮相的な擬人的とらえ方を抑制した可能性が認められた。この点は注目すべきである。（第7章5節、5－3）

やりとりの順序性に注目した分析では、以下の三つの知見が得られた。第一に、「受容的な見方の提示」と「異なる見方の提示」という相反するやりとりが、展示法の違いに関連してみられた。ゴリラ生態展示での、動物の接近に対してもつ「こわい」という発話に対して、親は共通してゴリラが「かわいい」「おもしろい」という印象をもたせるような話しかけをした。これを筆者は「動物園の動物は絶対の安全のもとに『見る』ことができるという場である」という見方が幼いうちから受け渡されていると考えた。（第7章5節、5－4）

第二に、チンパンジー展示では、旧展示では子どものことばを繰り返す「受

容」的あいづちが多いのに対し、新展示では、とくに4歳以上の子どもの発話に対して、関連する解説を加えたやりとりが増加した。親と子で相互に展示物を見るようながすやりとりも増加した。このやりとりは、子どもが興味を示したことについて、親も自分の興味を重ねやすい「対象」がそこにあるから成り立つもので、互いにそのやりとりによって自分の興味を再確認できる役割を持つと考えられる。（第7章5節、5-4）

第三に、疑問の解決のしかたでは、とくに、チンパンジー新展示において、親が子の疑問に答えるにあたり、展示物や解説板を利用するという新しい要素が加わった。（第7章5節、5-5）

調査2：動物の行動理解のしかたと表現のしかたの発達

多様な社会的やりとりをうながすもうひとつの可能性は、展示法との関連に加え、「その年齢の子どもが関心を持つ個体」と「親が関心を持つ個体」の違いや、動物同士の社会行動に関心を持つかの違いとの特徴があげられる。この違いがあるからこそ、相手の興味に対して自分の感じ方や考えを相互に交換していけると言える。それを確かめるために、ゴリラの典型的行動を映像で見て、何をしているか・その際の気持ちの想像を4つの年齢群（幼児・小学3年生・高校生・大人）および飼育体験群に答えてもらう実験を行った。

その結果、①自分の年齢に近いと感じる個体により関心が集まること、②何かを行動しているときの動物の気分を想像する際には、自分をその立場においてそのときの自分の気持ちをあてはめる傾向がみられたこと、そしてこの傾向は幼児の場合は他の年齢より強く、それは自分の気持ちと動物の気持ちが未分化であるためである可能性があること、③成長と共に、「その動物が見られていること」が意識されるようになり、とくに飼育体験群では強く意識されること、④動物の気分を想像して表現する場合、高校生での表現の多義性や豊かさがみられたことが、知見として得られた。（第8章5節）

調査3：来園者からと解説者からの展示法評価

来園者へのインタビューによると、来園者の多くは、ゴリラ・チンパンジーそれぞれの新しい展示法に対して高い評価を下していた。そこには、来園者自身にとっての過ごしやすさや、解説機能を備えた展示物の利用しやすさという意味での来園者にとっての「よさ」と、動物にとっては以前よりはよい環境にいるので「よい」とする動物の側からの判断も自主的になされた。

また、ゴリラの森で解説に携わる解説員へのインタビューによると、来園者の意見と共通した意見の他に、より望まれる展示への意見をそれぞれが持っていること、そして、何より来園者と関わることへの喜びと要望が語られた（第9章2節）。

以上の諸点に基づいて、筆者は、来園者の動物展示観覧体験の理解のための新しい枠組みを提示し、展示者側としての工夫を以下のように提言した。

展示観覧体験の理解の枠組み

子どもを含む来園者の「動物展示の見方」には、「見渡す」「見入る」「見えないことを想像する」があり、それらが入れ替わり立ち替わり表れているが、そこには年齢差も認められた。すなわち、幼児は興味引かれるある対象に「見入って」しまいがちで、全体を「見渡す」ことはしにくい、大人は「まず見渡し」、「見えないことを想像する」が、幼児のようには「見入らない」。これらの「見方」のうち、その展示を通じて何を感じ取り、その感じたことを交換するには、「見ている事実」に依拠しながらも「見えないこと」への想像こそが、野生動物の理解に欠かせない「見方」であると考えた。さらに、この「見えないことを見えることを手がかりに想像して意味づけていく」という行為に、能動的視覚が見いだせるとした。「新しい視覚体験を用意する」という展示法改革は、この来園者の能動性に依拠して意義を持つという立場から、展示観覧体験を理解することが重要である。

今後は、来園者の展示を見る体験を理解する枠組みとして、これらの三つの見方の表れ具合を展示法と関連させて分析し、来園者の能動的な「展示の利用のし

かた」を展示者側として支援することを提唱した。

展示者側としての工夫

この中で、とくに「見えないことを想像する」ための手がかりを、展示の諸要素に含め、展示解説の内容や、展示解説者の話の中に生かしていくことが必要だと主張した。親子連れの来園者が、相互の交わりを深めつつ、動物の理解を進めていけるために、展示者側が工夫すべきことは、動物本来の行動が展開しやすい環境を整えることを前提に、第一に、過ごしやすさを備え、親子や家族連れなどのグループが、ゆっくりと対話できるような物理的環境の整備、第二に、その展示法をその動物に対して行っている理由を含む動物園の姿勢についての情報提供、第三に、来園者相互の対話を進める上でも、また、この情報提供をする上でも、展示者側からの展示解説を行う「人」の存在が鍵を握る。

それらの「人」は、動物に対する理解を得るための解説とは別の、動物園という場がそこに成り立つ背景やそれを支えることがらについても来園者と意見を交わせるような展示解説が必要であると主張した。

2節 「交わりコミュニケーション」モデル適用の今後の課題

筆者の前提は、展示を見る人々を、自ら見る体験を作り上げる主体的能動的な「学習主体」すなわち「意味創出の主体」とおくということである。この立場から、筆者は展示評価に「来園者相互の社会的やりとり」を含めた観点を加えるべきだとした。その意義は、来館者にとっての「展示を見る体験」の持つ意味を、展示者側として理解しようとする姿勢をつくり出すことであった。つまり、来館者の学習体験における展示の役割分析、ということである。しかし、展示の役割分析は、あらかじめ結論を述べるなら、やはり来館者と展示者側との対話もその方法として採用されるべきである。

筆者が動物園展示の評価に用いた「来園者相互の交わりコミュニケーションモデル」は、主に発話内容に焦点を当てたものであったが、その利点は自然な親子

の間の言語的コミュニケーションの諸相を「展示を見ているとき」というリアルタイムで把握できるということであった。しかしながら、その発話採集対象者へのインタビューから、発話には表れない展示の批判的見方の存在や、展示前で見せた子どもの発話の根拠を親は日常的な子どもの様子から説明できるなど、「展示を見る体験」は、外側から第三者による観察だけではなく、その来園者自身の言葉で語られて初めてとらえることも示唆された。来園者の主体的・能動的な「展示を見る」姿勢を知る手だてとしては、行動観察にくわえて、来園者との対話が重要な位置を占めると予想される。

さらに、博物館の中でも、動物園は「生きている動物の展示」という点においてその特殊な位置にあるといえる。来園者の主体的な学習体験は、その「そこに具体的に生活する動物」への、そして「動物」からの、相互の交流という特殊性を付与されているのである。したが、動物園の展示を仲立ちとした来園者主体の学習の問題を考えるにあたっては、この特殊性が加味されるべきである。

来園者同士の「交わり」を生み出すものは、相互の関心であると同時に、やはり「いっしょに見ている動物の存在」「動物がいるはずの環境」、「動物の本来の生活を想像させる展示物」なのである。あるいはこうも言えるだろう。相互の関心は、展示動物や展示環境の影響を受けて、さらに深まるものである。したが、動物園の展示評価に来園者相互の「交わりとしてのコミュニケーション」の展開の程度を基準として採用する場合は、展示動物や展示物から感じ取ったことの「本人からの振り返り」による「調査者・展示者側との対話」を含めるべきであろう。発話採集などを含む行動観察は、その観察結果を対象者自身と共有しながら、対話の素材として生かすという試みも今後は必要だと考える。

そして、来館者一人ひとりにとっての博物館の役割を知るという「来館者理解」は、来館者自身の報告をよりどころとしながら、それぞれの日常生活の送り具合に、その来訪がどのような役割を持ちうるのかを博物館側が来館者と共有していこうとする、その指向性とたしかな実践を意味する。

3節 展示の二重性分析という来館者研究の性格

展示を見て、「見えないことを想像する」には、それまでの体験や知識に依拠

しつつも、確かに「新しい世界観」獲得の挑戦であるという側面がある。そして、この「想像」するという力をはぐくむ土台こそ、人と人の間の言語的コミュニケーションという「交わり」なのだと考える。人々は、「誰かの意図」に基づいて表現された展示を「視覚刺激」として受け取るだけでなく、そこから自分なりの解釈や世界観を構築するものである。その際に、「視覚刺激」のもととなるリアルな客観的事実を知るだけでなく、さまざまな人々の「事実の受けとめ方」について言語を通じたコミュニケーションを介して、背後にある真実というものを感じ取り理解しようとするのだ。大人は子どもの事実在即した素直な反応から学び、子どもはまだ見たこともない世界について、大人の価値観を通じて批判的に想像することを学ぶ。大人の価値意識は、子どもの理解したことがらを取り入れて、あらたな価値を含んだ意識へと変化していく。世代間のやりとりとは、そういうものである。

この世代間のやりとりに関して、とくに親子連れの「学び」の諸相については、さまざまなとらえ方が実践されている。ポーランら（1996）は、やりとりの具体的な内容を記録・記述して、学びの「レベル」（learning level）と観察されうる行動（observable behaviors）との関係について、「展示から家族連れが学んでいるとわれわれが受けとめていることは、ある特殊な行動と関連した『学びのレベル』のことである」と結論している。すなわち、来館者行動の観察記録を分類して、そこに共通する要素を引き出し、その要素に基づいて展示と関連した『学びの特徴』を把握することが、「やりとり」を「学び」の諸相としてとらえる方法になっている。こうした、観察データからいわば帰納的にくみあげていく方法は、おそらく展示空間という物理的環境における、親子など年齢の異なるグループのやりとりの特徴ある「生じやすい行動」のなかに、『展示効果』とは別の自主的な学習の芽を見てとるという、独自の研究方法として注目すべきものがあると筆者は考える。

しかし、展示の出発点は、ものごとの客観的存在に依拠しつつも、そのものごとのどの側面を浮き彫りにするかという、展示者側の価値意識に支えられた表現なのである。だからこそ、「だれに」「なぜ」その展示なのか、その手法なのか、その価値意識自体を伝える努力をし、展示意図そのものを問題とするような「見る人」「展示を作る人」相互の対等なやりとりが存在すべきであろう。

そして、来館者研究は、展示意図自体の作り直し・検討の作業を進めるためにこそ必要なのであって、展示改革という手法にのみ矮小化してはならないだろう。また同時に、それは、来館者側が、「展示意図を理解し、批判し、自らの世界をより豊かなものにしてく場」として主体的能動的に働きかけることをも意味している。

博物館研究における来館者研究の未来は、まさに、来館者相互の交わりを来館者自身が主体的に豊かにしていくこととあわせて存在し、展示者側からの表現が、自分たちにとってどのような意味をもつかの能動的な探索を支えるものでなければなるまい。このことが、博物館存在の社会的意義を博物館側・来館者側双方から問うという博物館評価の作業の基本におかれるべきであろう。

布谷と芦谷（2000）によれば、博物館外部からの評価においては「来館者自らの知の創造」とその外延を知ることが、重要な評価の視点として提起されている。序章で触れた「展示の二重性」とは、展示者側からの効果検証と見る側からの独自の意味構築という、それぞれの観点からの展示評価を試みつつも、「展示に意味を持たせるのは、それを解釈する人々自身が主体となる」という基本的なスタンスを堅持することが課題だと考える*9。そして、来館者研究には、展示解説をはじめ展示をなかだちとしたさまざまな教育プログラムを日々実践している「解説者やプログラム実践者」へのヒアリング、およびその人々との共同研究も重要だと考えるものである。言い換えれば、展示の持つ二重性とは、展示者側の目的意識に支えられてそこにあり続ける物理的存在としての展示が、観覧者にとっては、その意志を感じながら自由に使いこなして自己革新をしていくための「心理的な道具」でもあるということである。そして、「展示の意図」自体も、来園者の観覧体験すなわち道具の使われかたを展示者側が理解することで、変容していくものと考えられる。意図の変容、それが実際に動物園の動物展示において、どのようにおきていくのか、そのことを追求すること、それが筆者の次なる課題となるだろう。

4 節 人々の価値観に依拠し、価値観を変える動物園とその未来

私たちは、近代文明の中に生まれ育ち、野生動物の文化的価値すなわち、太古

からの野生動物と人間とのかかわりの価値について、あまり熟慮する機会なく今日を生きている。近代社会以前は、野生動物とはほとんど関わりを持たないか、持つとしたら自分自身や家族・家畜をおそう「敵」であるか、狩猟の対象か、あるいは宗教的な意味においてのみ存在する「象徴」であった。「関わり」という点で言えば、野生動物の家畜化がもっとも長い歴史をもって意味を持ってきたのだらうと考えられる。人間と動物との関係は、人類が人類になってきた過程を振り返ればわかるように、ともに大きな影響を与えあってきたはずだが、それを「実感」する経験を日常生活ですることはできない。

その長い過程においてはほんの一時期にすぎない、この近代社会の幕開けと共に私たちは「動物園」を世につくり出したのである。この時代認識は重要である。なぜなら、生きている動物を「見る」という行為、見るために動物を飼い、展示するという行為は、人類の長い歴史で初めておきたことだからである。浅見(2000)によれば、動物を眺める、愛でる、見るという行為は、現実の人間関係の計画的編成を強られる人間と違う、安楽さを動物に求めているからだという。こうした「求め」が、たしかに、動物展示を見る場合にあることは否めない。しかし、同時に、展示者側としては、動物展示がもたらす影響について、あるいはその可能性について探求することが求められている。たとえば、Derwin and Piper(1988)は、動物園のかかげる目標のうち、人々の価値観にかかわる目標（情緒的目標とされている）について、次のように主張し（引用は p.439）、来園者が学んでいることや動物園に来て持つ感情は、人々が「見ている動物」やその動物が「していること」に強く関連しているとし、動物園の負うべき重大な義務を主張する。

情緒的な目標は、来園者が動植物のことを尊敬の念を持って話したり働きかけたりするような、あるいは来園者が自然と野生動物に対する理解を表明し、機会があるなら保護活動を支持する、といった要素を含んでいた。

たしかに動物園が動物展示を通じて果たさなければならない、というこの義務については、筆者も同意できる。しかし、長い歴史の中で連綿と受け継がれてきた「動物観」や「人間が自然や野生動物に対してとる実際の態度」は、その態度

を疑うという行為を通じてのみ変わっていくものである。とりわけ近代社会の「大規模な自然からの収奪」のもとに我々が生活してきている点を考えると、動物園が展示を通じて来園者に届けうるメッセージの可能性を否定はしないまでも、やはり、今日の自然資源の枯渇をとまなう生産活動における、わたしたちの価値観の転換がさまざまな場面で行われることがあってこそ、動物園のメッセージが意味を持つものと思われる。

その転換を動物園側として生み出すためには何が必要だろうか。第一に、人々と動物園展示者側との「対話」的な関係をどうしたら創り上げられるかを追求することである。第二に、対話的關係が築きあげられやすい展示デザインも必要である。たとえば、本調査で見た、類人猿の能力を体験できる展示の工夫例があげられる。人々は、工夫された展示の諸要素を利用して互いの関係を深めつつ、類人猿に対する見方を得たのである。

他の事例もあげよう。「絶滅に瀕している類人猿を守るために、人々を教育する」という明確な目標のもとに改革されたアメリカのオクラホマ動物園では、展示パネルは、社会構造や生物学的な特徴、生息地、保護の状況を紹介するものとなっている。3,8 cmの厚さの強化ガラスがぐるりと動物展示場全体を囲み、子どもたちのためには、ロープやネット、小高い山などに上れる場所が用意されており、単に動物を見るだけとはなっていない。そこはアメリカ障害者使用具安全基準(略称) ADA の認めた遊び場となっており、たいへん利用率が高い。また、類人猿の生息地の植物層を紹介する場所もあり、その中のどれを食物として選んでいるのかが解説されている (Grisham, Lyon, Pearson, and MacFarlane , 2000)。

このような、子ども用のアスレチックジムの併設という工夫は、親子ともに類人猿の能力を推し量ることができる点で、たいへん有意義である。この展示では、秀でた動物の能力を自覚できると共に、それを見ている親や大人にも何らかの野生動物のイメージをつくり出している点がすぐれている。まさに、対話的關係が生み出されている。

筆者が 1995 年にジャージー動物園*10で行った来園者調査 (並木 1998)でも、同様にロープや丸太が組まれた小さな丘で、大人が子どもの動きと関連させて展示動物 (オランウータン) を見ようとする場面が観察された。そこでは、「オランウータンはもっと早くわたれるね」「あ、(オランウータンが) こっちを見て

るよ、がんばれ！」などの発話がなされていた。このオランウータン展示施設では、オランウータンとシロテテナガザル（やはり東南アジアの動物）とを同じ展示施設で飼育して見せており、複数の種類を混在させて展示するという手法にも挑戦している*11。この展示は、徹底した野生の再現でもなく、だからといって冷たい鉄の棒とコンクリートや擬岩、ガラス使いだけでもない。強化ガラスをはめ込んだ人工的な寝室には木の枝や葉など自然物がたくさん持ち込まれ、運動場には枝を切られた大きく太い木が植えられ、その木々の間には、人工的なロープや鎖がはり巡らされている。ちょうど、本論で調査したゴリラの生態展示の手法とチンパンジー新展示の行動学的展示の要素を併せもつ。人工物と自然物が適度に混じり合い、野生生息地そのものを紹介した展示ではないにしても、来園者はオランウータンの本来の生息地の主要な要素（生活するのに必要な環境要素）を見てとれる。

子どもを含む家族連れ来園者の「能動的な視覚」とは、たとえ人工物であっても、展示されている動物たちが実際に使っている道具・できあがった巣（ベッド）・座っている場所やそこからの眺め・まだ歯形の残る食痕といった、「確かにそこに生活していること」が感じ取られ、それらと野生生活の結びつき（それらの諸要素が野生ではどのように環境の要素として利用されているか）が解説されるような工夫によって創り出されることである。来園者を「再現された生息地環境」に「浸らせる」というイマージョンの展示手法は、来園者が受け身でいる限り、そこでもたらされる「新しい視覚体験」は「錯覚」の域をこえることはないだろう。「新しい視覚を創り出す」のは、来園者すなわち展示観覧者自身の主体性・能動性に基づく意識であり、それがもたらされる物理的環境・人的環境（解説者の語りを意味する）を展示法改革の目的の中心に置くべきだと考える。

同様に、飼育・展示されている動物個体の福祉の観点をその根に持つ環境エンリッチメントと行動学的展示は、その行動を野生生活における適応として紹介する展示解説がよりいっそう求められる。ここでの「能動的な視覚」とは、自分自身の感覚や気持ちをその動物の行動理解に動員しようとする過程で生まれる。そこには、近代以降の「自然と隔絶された生活を送ってきた人間」の中の「生き物の部分」を引き出し、見つめようとする意志がある。その際、ひとつひとつの行動が長い進化の過程でそれぞれ意味を持っていることについての解説が重要にな

ってくると考えられる。それが欠けると、前述のような皮相的な擬人主義に基づく誤解が生じやすくなるだろう。

動物園は、今後ますます野生動物たちの保護や彼らの生活環境である自然を守っていくという使命を課せられていく。忘れてならないのは、自然を守り野生動物と共存しようとする意志とは、こうした「深い興味や好奇心」を子どもたちにもたらす動物たちの「存在」そのものであるという点だ。まさに、そこに動物に対する人間の原初的な能動性を見いだせるからである*12。その能動性に依拠しながら、行動解説を不断に行っていくことにより、野生動物の理解は深まっていく。同時に、大人は、動物と関わりを持とうとする子どもたちの様子からもさまざまなことを学び、影響を受ける。子どもの内面に触れて、子どもの理解が一層進み、その理解をもたらした動物の役割、存在価値を考えることができる。

動物園の存在目的は、まさに「生き物たちと共にあること」を何ものに替え難い価値として意識し続けていける「人々」をつくっていくことなのである。展示のあり方や解説、教育プログラムも根本的にはそこに帰結する。

しかし同時に、野生動物と共存する意志をもち、動物たちの存在を大切に思うということは、そこに、動物園の存在自体の問い直しが含まれる。あるいは、動物を「見る」こと自体への問い直しが含まれる。かつて、近代社会の幕開けとともに、人権意識の拡大が「博物館の市民への公開」を生み出したように、時代とともに、動物園をどういう存在として人々が受けとめてその存在意義を高めていくかは変化するものである。筆者の予想では、動物園の運営自体に人々が参画するという経験を経て、「見せる側」（展示者側）と「見る側」（観覧者側）がともに「人間と野生動物の関係のあり方」を具体的に構築するための公共的空間として成り立っていくものと考えられる。しかしそこでも、何らかの「動物との共存の感覚」を体験することが重視されるにちがいない。人間は自然から学ぶことによるのみ「人間という自然」*13を知ることができるからである。

5 節 来園者と展示動物との関係を含んだ展示改革の当面の具体的課題

本研究は、来園者の側から見てその動物展示がどのように評価されるかを検証・考察してきたものである。しかし、展示物が「生きている動物」であるという

側面は、おのずと「展示動物が来園者とどのような関係を持ちうるのか」という観点を含んだ展示改革や展示解説が研究されるべきだという点を含んでいる。

動物の福祉を考えた展示改革も、その根底にはこの問題を内在させたものであった。本研究ではとりあげなかったが、来園者が展示から受け取るメッセージあるいは、積極的に探し求めた結果としての情報、さらには来園者相互の交わりの深さについても、この「展示動物と来園者の直接の関係」は深く追求されるべきである。

実際には、その種によって、来園者の存在（見られている時間・頻度・来園者の態度）と展示特性（狭い屋内の檻なのか、広くて屋外なのか、隠れ家がたくさんあるのか、など）が複雑に関連し合って、その動物自身の行動も影響を強く受けるものである。すなわち、種特異性がある。さらには、同種でも、個体差も非常に大きい場合がある。

展示改革には、もちろんこれらの諸問題を含めた計画が練られるが、その際に、種特異性と個体差が来園者行動との関係でも大きく変化することを考慮すべきである。この立場からの研究は、非常に具体的でその展示のその動物とそこにおける来園者という組み合わせで進めていかなければならない。これは、動物園ならではの特殊な調査と研究になる可能性がある。しかし、すでに類する研究は始められており（Chamove, Hosey and Schaetzel, 1988 ; Mitchell, Obradovich, Summer, DeMorris, Lofton, Minor J, Cotton L, and Foster, 1990 ; Mitchell, Herring, Obradovich, Tronborg,, Neville and Field, 1991 ; Price, Ashmore and McGiveren, 1994）、そこでの方法を参考にしつつ、個別具体的な調査が進められることにより、展示解説の内容は深みをますことになる。

以上のことから、展示動物の飼育環境を整えて、彼らの生活の質を高めるといふ、動物の福祉の観点からの研究は、実は、動物たちの生活を成り立たせている環境の諸要素は何かという、重要な情報提供の基礎ともなる。この点を不断に追求していくことが、都会で野生動物を飼育し続ける動物園の存在を許すこととなるだろう。

6 節 結語

本論の目的（序章5節）に沿って、二つの調査の結果の読みとりと類人猿展示の評価、そして動物園の今後につなげるいくつかの課題を提起した。

ふたたび、「交わりコミュニケーション」に立ち返ってみよう。尾関（1996）は、次のように指摘している。

個々人の間の相互了解や合意、交わりを積極的に形成していくコミュニケーション的实践を強め、それに基づく社会関係を形成していくことは、自然のシンボルの意味の豊かさを社会的に回復することにつながっていく

動物園の展示動物は、まさにシンボルの意味を来園者にもたらし、その意味の豊かさを相互の言語的コミュニケーションにおいて確認し、あるいはあらたに創り出している。動物それ自身の存在感も含めて、それらを飼育・展示・解説するという動物園という「場」があってこそその豊かさの創出が可能なのである。とすれば、コミュニケーション的实践とは、筆者が分析した来園者相互の交わりの豊かさと同時に、動物園側と来園者間の交わりももちろん含まれ、さらには、動物園側の「組織内コミュニケーションの豊かさ」も含まれるだろう。

そしてまた、学習環境として動物展示やプログラムのあり方を考えていく上では、社会構成主義の考え方をベースにして、利用者の認識変化や発達をとらえていく方法も有効であるだろう。

実際、博物館における「学び」については、数多くの著作が世に出ている。たとえば、浜口（2000）、鷹野（2000）、山田（2000）などの論調は、展示の教育的価値を重視し、博物館職員との直接のコミュニケーションを呼びかけている。また、（財）日本博物館協会（2001）は、博物館の公共的使命の増大を「学習支援の強化」という方向で担うという姿勢を明記している。そこでは、館の職員にとどまらず、解説員やボランティア、ミュージアムショップの職員までもが「人的資源」として位置づけられ、それらの人々が活かされて「博物館力（引用：p.4）」が増大するとされる。すなわち、「対話と連携」とは、一方で来館者との、他方では館の職員間のそれを指している。そしてこれらの人的資源の有効な活用が利用者の「学習支援」であり、「展示」と展示に関連して展開される教育普及

活動は、「市民との対話のツールである」と提言されている。

とくに、生きている動物との出会いは、大げさに言えば、一生に一度の「生の体験」である可能性もある。人々は、常にそこに立ち返りながら、その体験の意味を自分の人生のそれぞれの時期において変化させていくものなのである。だからこそ、子どもの「初めての体験」は、子どもにとっての大事さと同時に、大人にとっても重要な意味を持つ。親子で動物園を訪れる、あるいは三代で訪れる、この動物園訪問体験はその家族に何らかの「確かな交流」「互いの理解」をもたらすのである。そこでの「学び」について、まだわれわれは、把握する術を十分には持っていない。それは、単に観察やインタビュー、事前・事後テストなどだけでつかめるものではなく、来園者自らが自らを語ること、その後の日常生活における影響を語ること、そういう「学びを語る」仕組みが社会に整うこととも関連するだろう。その仕組みを成立させる鍵は、来園者すなわち利用者が自ら「動物園利用研究」の主体として登場することである。研究主体として自らの学びを問うのである。逆に、そうした仕組みが整うということは、「場」を提供する側が、「場」のもつ役割を利用者の視点から常に問い直し、かつ、そこに展開する学びの諸相を自らの展示意図と関連させて再構成する力量が備わることでもあるだろう。

その意味で、教育・保育・遊びの研究・自然と人間の関係哲学など、多領域の研究成果に学びつつ、展示を軸とした博物館教育の独自の研究を来館者ともに進めていきたいと考えるものである。展示者側の展示意図の再自覚化とそれに伴う展示改革は、来館者の展示観覧体験に学びつつ行われ、人々は、展示から学んだことがらや「ともに学んだ」社会的事実¹に依拠しながら、日常実践にそれらが織り込まれていく過程を喜びとして体験する。このことに関連して、Moscardo and Pearce (1986) の調査結果は示唆に富む。著者らは、屋外のオーストラリアの17の環境教育施設を調査して、訪れた人々がどの程度そのときの体験や解説テーマを記憶しているのかは、彼らの楽しく過ごした度合いによるらしいことを示した。すなわち、そのときの楽しさとメッセージが結びついて記憶されているということである。このことは、楽しいと感じられるその質についてより深い調査が必要であるにしても、少なくとも、「場所」や環境の違いにもかかわらず、共通してこの傾向があると確認されたことは重要である。

最後に、展示の持つ二重性分析を、動物展示の特殊性に関連して考えておこう。動物展示では、展示者側の意図とは独立した「生きている展示動物」の存在（つまり、ジオラマの一要素ではなく、そこに生活があるということ）と、利用者側の各人の意味構築に大きな役割を持つ「生きている展示動物」の存在（つまり、働きかけの対象であり同時に相手から働きかけられるということ）があるという、他の博物館諸施設にはない独自の特徴がある。「展示」という展示者側が表現した意図伝達のための「心理的道具」が、それを利用する側にとっては「道具それ自体との交流」という要素を含んでいる。道具との個別の関係を創り上げながら、その意味づけを変えていくのは利用者である。その意味づけが変わることを道具の提供者すなわち展示者側も具体的に把握しなければならない。動物展示における「展示の二重性」とは、こうした心理的道具の使われように、道具との交流という要素が含まれ、むしろそこに動物展示の本質が見いだせるということを経験すべきだろう。

展示動物の豊かな飼育環境を整え、本来の生息地を想像させるに足る情報をそろえ、人間と自然の関係の未来について語り合えるような観覧者相互の交わりの場を大切に、三者が互いをより必要に思えるような気持ちを創り出していく、その極めて実践的なとりくみこそ、動物展示の価値の真価を発揮・推進する条件となるであろう。そういう動物園づくりに本論が貢献できることを望み、本論を閉じよう。

*1 「人間の感情が他の動物、たとえば類人猿と同じであるとは言えないが、感情や理知のような再考の精神的能力でさえ、すでに下等な動物に芽生え始めているのである」（引用は196ページ）、として、その当時の「人間と獣は別物」という考えに警鐘をならした。つまり、動物におこる感情と人間にわきあがる感情との間の連続性を主張した。擬人主義は、人間の都合のよいように動物を人間の側に引きつけてしまうことである。ゴリラの初期研究者の一人であるシャラー、G.は、ハクスレイを引きながら、擬人主義の落とし穴についてふれている。

*2 「環境教育学会自由集会」における議論から。各地の動物園で動物解説に携わる人々から提起された問題のひとつは、この「擬人化的手法を動物解説に取り入れること」のよしあしについてであった。

*3 5つのバイオームタイプ（アフリカのサバンナ、熱帯雨林、広葉樹林、針葉樹林、そして砂漠）を呈示して、そのどれを好むかをこの年齢の子どもたちに聞いた調査。

*4 Coe, J. 1998 (前掲書) に紹介されている、以下の論文による。Brounwyn, B., and Ford, J. C., 1991, *Environmental Enrichment in zoos: Melbourne Zoo's naturalistic approach*, *Thylacynus* 16 No.1: 12-17

*5 (前掲書)。引用された文献は、Lueders, E., (ed) 1998, *Writing natural history: Dialogues*

with authors,

*6 ギル (1993, p.52-54) によると、「activity」(能動的活動)の役割は、潜在的な知から顕在的な知への高まり(変化)を引きおこすこにある。この認識の変化は、何かに気づいてある対象に集中するという傾向の中に、あるいはまた、感じたことを概念化する中に見いだせる。これを筆者の模式図に引きつけてみるなら、前者は、たとえば「見渡す」から「見入る」への、後者は「見入る」から「想像する」へのプロセスであると言える。

*7 ここでの実験のひとつは大学生に試作看板を作ってもらって、自分たちの予想と来園者からの反応を比較したものである。そこでは、とくに、「死」を取り扱うような内容をサインに取り入れるとより効果を上げているらしいという結果がえられた。また、来園者の行動をポジティブにとらえていく上でもこのような調査が積極的役割があるのではないかと述べており、博物館における展示デザイン上の「サイン類」研究とも共通している。

*8 80年代から今日までコペンハーゲン動物園の園長であり、動物園の教育プログラムにかけては常にオピニオンリーダーのひとりである。

*9 このことに関連して、以前から行われている「行政評価」や、その流れによる「博物館評価」をどうみるかが重要である。いうなれば、「お金(税金)をかけて何が得られたのか、かける価値はあるのか」という「成果評価」の視点である。この流れについては注意深くなるべきであると筆者は考える。人々の文化創造は、目に見える成果という形で測るものと言うよりは、日々の生活で人々が何を大事に思って暮らしているのかという極めて日常的で実践性を伴うプロセスそのものと筆者はとらえている。とくに、博物館は、人々の文化的活動の蓄積の場であることを重視すると、「成果」にこの活動蓄積をどう組み込めるかが課題であろう。

*10 ジャージー動物園とは、フランスにほど近いイギリスのチャンネル諸島の「ジャージー島」に、ジェラルド・ダレルが創立した私設動物園である。その後、数々の絶滅に瀕した野生動物の砦になるべく、現地の保護プロジェクトと協力して繁殖に成功した野生動物の野生復帰に努め、展示施設も教育的メッセージを発信するための場として位置づけたものとなっている。

*11 「ファーストインプレッション」という展示施設では、南米の「アメリカグマ(メガネグマ)」「アカハナグマ」をともに飼育展示しており、同時に、この施設そのものが動物たちのエンリッチメントの状況を解説し、南米の動物層を紹介し、そして自らのミッションについても解説している。決して大規模ではないが、動物の行動を観察し、飼育環境の整備の方向を知ることができ、自然木と植生・水の流れ・自然の土を動物たちが利用できるようになっており、同時にこの動物園が目指す方向と実際の成果について知ることができるという、まさに来園者に楽しみをもたらしながら、彼らを信頼してメッセージを発信し続けるこの動物園の姿勢こそ、あるべき未来の姿を示すひとつの理想的な例であろう。

*12 動物園という特殊な環境下では、展示スタイルがどうであっても、来園者は年齢にかかわらず、自ら動物との関わりを持とうとする傾向があることを、来園者行動観察からタニククリフ(1995)は指摘している(Tunnicliffe, S. D. 1995, Zoo Talk, Journal of International Zoo Educators, No.32: 87-97).

*13 「人間」という自然が、生物としての基礎を持ちつつ社会的に作られてきており、それが本質であるということ。小原(2000)を参照。